聖書を読んだことのないあなたへ
あなたも聖書を学んでみませんか。

☆初めに☆

　キリスト教において、神様が私たち人間に対して語って下さった聖書の御言葉は、私たちが、人として生きるために必要な、真実なお言葉が語られていると信じて大事にしています。一体聖書に何が語られているのか、あなたも少しずつ、分かりやすい解説と表現で、聖書の深い内容を学んで見たいと思いませんか？
　もちろん聖書は、語られたのは神様だと言っても、実際に書いたのは人間ですから、単なる人間の言葉だと思う人もいるかもしれません。人間の言葉であるなら、素晴らしい言葉も、励ましとなる言葉もあることは事実ですが、人間を本当の意味で生かす、力ある言葉は語れません。なぜなら、語る人間自身が、すべてのことが分かっているわけではなく、先のことが見えているわけでもないからです。
　聖書のお言葉は、すべてのことをご存知であり、先のことが分かっておられる神が、人間に働きかけて、神のお心を知らせ、人間がどのように生きる者として造られたのか、その神様の御思いを書かせられたものですから、神様のお言葉には、人間を生かす力があると言えるのです。

さあ、あなたもあなたのことをすべてご存知である神様のお言葉が記されている聖書の世界に、勇気を出して一歩足を踏み入れて見て下さい。決して失望することはないでしょう。そこには大きな希望と祝福とが満ち溢れていることを体験して頂けるでしょう。

神様は、聖書を書いた人の霊（人間には神のことを思うことができる霊の部分があります。それは心とは違うものです）に働きかけられ、導かれ、神のお心を書くことができるように助けられたから、神のお言葉だと言えるのです。

そうです、聖書には、私たちに対する神様からの語りかけがあります。神様が私たちに何の関係もないお方であるなら、その語りかけを聞く必要もないのですが、神様は私たちの造り主であって、私たちの歩みを導くことのできる唯一のお方です。このお方が、私たちが人間としてどのように歩むように導こうとしておられるのか、聖書の御言葉においてそのことを語りかけて下さっているのです。

ここでは、新約聖書のルカによる福音書を、少しずつ学んで頂きたいと思っています。それを読みながら、今の私たちに語りかけて下さっている神の深い御心を思って頂きたいのです。今も生きておられる神が、何を語りかけて下さっているのか、今の時代を生きるために必要な神様の御声が記されていると信じて、静かに耳を傾ける時を持つことが大切です。

初めての方にも聖書の内容が分かるように、優しい言葉で解説しながら、あなたの人生にふさわしく、神様が語りかけて下さっている内容を理解する手伝いをしたいと願っています。それを読んで頂くことによって、ご自分に対する神様からの御声を聞き取る手助けとなって、神様の素晴らしさを理解し、喜ぶことができるなら、何と幸いなこと

でしょうか。
　聖書は単なる金言集ではありません。ですから、まず記されている小区分の箇所を読んで頂いて、それから、その日の取り上げた聖書箇所を読まれ、自分への語り掛けを聞くようにして欲しいと願っています。
　それでは、初心者の方にも分かるように、聖書用語に説明を加えながら、これから少しずつ学んでいくことにしましょう。聖書を持っておられたらそこを開けてみて下さい。聖書にはいろいろな翻訳聖書があります。ここでは口語訳聖書で見ていますが、他のどのような訳でも構いません。（新改訳、新共同訳など）ぜひそこから、あなたに対する神の御声を聞き取るために、トライしてみて下さい。

第１集

＜目　次＞

１：1～4　　序文

１日　１：1～4　　福音の調査　　６頁～

１：5～25　　ヨハネ誕生の告知

２日　１：5～7　　悲しみ　　９頁～

３日　１：8，９　　神の支配　　13 頁～

４日　１：10～12　恐れるな　　16 頁～

５日　１：13，14　祈り　　19 頁～

６日　１：15～17　神の豊かなご計画　　22 頁～

７日　１：18　　神のみ言葉　　25 頁～

８日　１：19、20　信仰の修正　　28 頁～

９日　１：21～23　低くされた信仰　　31 頁～

10 日　１：24，25　心のうめき　　35 頁～

１：26～38　　イエス誕生の告知

11 日　１：26，27　信仰のきらめき　　38 頁～

12 日　１：28，29　静かに待つ　　41 頁～

13 日　１：30～34　不信と疑問の違い　　44 頁～

14 日　１：35～37　神の全能　　47 頁～

15 日　１：38　　純粋な信仰　　50 頁～

１：39～56　　マリヤ、エリサベツを訪ねる

16 日　１：39，40　真の交わり　　53 頁～

17 日　１：41～45　聖霊の感動　　56 頁～

18 日　１：46、47　主への讃美　　59 頁～

19 日　１：48　　目をとめて下さる神　62 頁～

20 日　１：49、50　主を恐れる者　　64 頁～

21 日　１：51～53　どんでん返しの人生　67 頁～

22 日　１：54，55　神のあわれみと真実　71 頁～

23 日　1：56　　主にある交わり　　74 頁～
1：57～66　　ヨハネの誕生
24 日　1：57，58　神のまなざし　　77 頁～
25 日　1：59～64　信仰の回復　　80 頁～
26 日　1：65，66　主の御手　　83 頁～
1：67～80　　ザカリヤの讃歌
27 日　1：67～71　霊的自由独立の信仰　87 頁～
28 日　1：72～75　救いの目的　　91 頁～
29 日　1：76，77　福音の道備え　　95 頁～
30 日　1：78，79　神を喜ぶ　　99 頁～
31 日　1：80　　福音の夜明けのための準備
102 頁～

小区分　　（１：１～４序文）
１日　１：１～４　福音の調査

伝道者(神様からの福音を伝える者として立てられた人)であり、医師であったルカが、キリストのことを知ってほしいと、一人の人を導くために、神の助けを頂きながら、できる限りの詳しい調査をして、ルカによる福音書を書き上げました。その当時、幾人かの人々が、すでに同じような福音書を書き上げようとしていたのです。

けれどもルカは、それが書かれるのを待とうと思ったのではなくて、自分の足を使い、いろいろな人から聞き取り調査をして、努力して書いたと言うのです。しかも単なる歴史小説を書こうとしたのではなく、イエス・キリストが来て下さった事によって明かにされた、真実なる神の福音（神が人間にとってよい知らせをもたらして下さった内容を、キリスト教では福音と言います）として書き著し、この福音書を通して、命を与える福音をぜひ知って欲しいと願っていたテオピロさんに、神の導きを受けて救われてほしいという､ひとりの魂の救いが目的で書き記したのです。

この福音書を記すことができたのは、ルカの持っている人間的な知恵と努力によるものではなく、ルカの信仰を用いて書かせようとされた神の働きかけがあったからです。パウロという伝道者が書いたテモテへの第２の手紙３:16にはそのことを「聖書はすべて神の霊感を受けて書かれたものである｡」と言っています。神様が聖書を書く人に、神の霊感を与えられたから書くことができたと言うのです。

もし、ルカが、私のような者がキリストの福音の真実を

書き著すなんておこがましいなどと考えていたとしたなら、今日の私たちは、神のお言葉としての、ルカによる福音書を読むことができませんでした。

ルカは、この福音書を書く時、謙虚になって、「この小さな者に働いて下さって、誤りのない福音を書き著せるように助けて下さい」と祈りつつ向かったと思われます。

神はなぜ、不完全な人間を用いて、完全な誤りのない福音書を書かせようとなさったのでしょうか。欠けの多い人間に、神のお心がすべて分かるわけではありません。けれども、そこに聖霊（今は、神が遣わされた神である霊と思って下さい。後に詳しく説明していくことにします。）が働いて下さることによって、誤りのない神のお言葉を記すことができるように導かれたのです。これは何という憐れみの事実でしょうか。

神は、ルカの信仰に、聖霊の導きをお与えになり、彼が願っていた一人の人の救いのためにという、彼の最初の思いをはるかに越えて、全時代、全人類に、救いと慰めとを与える福音として書き記させられた結果となったのです。

もし、ルカの思いの中に、一人の人のために真剣に祈り、熱心に、救いに導きたいという思いが起こされなかったならば、この福音書は書かれなかったことでしょう。何とかこの福音を、そこに示されている神の慰めを伝えたいという、燃えるようなルカの思いがあったからこそ、神はそのルカを用いられたのです。神のなさることは、そのような人間の思いをきよめた上で、それをご自身の御思いを正しく伝えさせるために用いて下さるという、驚くべきものであったのです。

ルカ自身が、福音の中に込められている驚くべき神の恵みに生かされている者として味わい、喜びに満ち溢れてい

たからこそ、この福音の恵みとその素晴らしさをまだ知らないで、人生の価値に気づいていない人に、何とかこの福音を受け取ってほしいと、燃える思いで向かったのです。

その結果、書き記されたのがこの福音書ですから、この福音書を読むあなたも、そこから、あなたを愛して救いたいと思っておられる神様の思いを読み取って、私たちの人生がいかに価値あるものとして歩むように、その人生を導こうとしておられるかを知るならば、この福音書はあなたのために書かれたと言っても過言ではないでしょう。

神はルカの思いを越えて、全人類のために福音書を残されたのです。この福音の素晴らしさが分かったなら、私たちは、自分だけが幸いになるのではなく、自分の周りにいる人々にも、同じ恵みにあずかって欲しいと思うようになります。一人の人の魂の救いのために全力を注いだルカの熱く燃える気持ちが、私たちにもよく分かるのです。

小区分（１：５～25　ヨハネ誕生の告知）
２日　１:５～７　悲しみ

この個所に出てくるザカリヤという人物は、その当時において、神殿礼拝を司る祭司の家系に生まれた者でした。（祭司とは、神と人とをつなぐ仲介者とも言える、神に仕える職です）祭司制度は 1400 年ほど前のモーセの時代に制定されました。（出エジプト記に出てくる偉大な指導者）初代の祭司は、モーセの兄であるアロンであって、祭司に血統が重要視され、受け継がれてきて、この時代には多くの祭司がいました。アロンの血統は、24 氏族に分かれた祭司家系として広がり、ザカリヤは、その中の第８氏族であるアビヤの家系に生れ育ちました。

それは、祭司の名門でありましたから、小さい時から祭司となるための教育を受け、祭司として生きるということがいかに大切な事であるかを教え込まれて育ってきました。

ザカリヤ自身も、祭司という使命の重大さ、それが、神に聖別された特別な務めであることを悟る者となっており、その務めに就く者とされていることを喜びとし、誇りとして、真心をもって、神と人とに仕えてきました。

主に喜ばれることを願って仕えるザカリヤとその妻の信仰を、ルカは６節で、「ふたりとも、神のみ前に正しい人であって、主の戒めと定めとを、みな落ち度なく行っていた」と言い表しています。

そんなザカリヤにとって、いつまでも消すことのできない大きな悲しみの傷がありました。それは、自分たち夫婦には、子供が与えられなかったということでした。

当時は、家系が重んじられていましたから、子供ができないということは、自分たちの代で家系が途絶えてしまうことになるのですから、これは、自分たち夫婦には、神の祝福が注がれていない結果なのだろうか、という思いをどうしても打ち消すことができなかったのです。

もちろん、妻エリサベツにとっては、それ以上の大きな憂いとして、その心に深い傷が残っていたのです。それは、不妊の女という烙印を押され、ユダヤでは、不妊であると言うことは、家系を閉ざす、神の呪いを受けている者という考え方があったので、神から呪われている者という目で人々から見つめられ、大きな恥ずかしめを受ける中にあって過ごしてきたのです。

25 節を見ますと、その頃のエリサベツの心境がどんな思いに満ちていたかがよく分かります。「主は、今私を心にかけてくださって、人々の間からわたしの恥を取り除くために、こうしてくださいました。」と言っています。これまでは夫婦で、「神は、決して私たちを見捨てておられるのではないよ」と互いに慰め合ってきたことでしょう。

人間には、各々異なった大きな悲しみの傷というものを持っているものです。神に信頼し、よりすがって歩んでいるのに、神は、どうしてこんな悲しみの中に落としたまま放置されるのか。ひょっとしたら、私が不信仰だから、その結果、こんな悲しみを与えられたのだろうか、神の助けと祝福を頂ける信仰になっていないからだろうか。ともすれば、信仰者として歩んでいながらも、神から見捨てられているのではないかと考えて、悲しみに押し潰され、喜びも力も失ってしまう時があります。

他の人に理解してもらえない悲しみと叫びとは、私たちの心を引き裂く力を持っており、激しい心の痛みを覚える

のです。まして、神にまで見離されているという思いが消えないならば、耐え難いものです。
　神を知らない人が、悲しみの中にあるのは、暗黒と絶望でしかありません。その悲しい事柄が解消されない限り、平安を得ることができないのです。
　しかし、信仰者が悲しみの中に置かれるのは、私のすべてのことを知って下さっているお方がいるという慰めと、その悲しい事実すらも用いて、主の助けと憐れみとを体験させて下さるという、霊的恵みに目を開かせて下さり、目に見える部分は厳しい状態であっても、信仰者に対して、神の驚くべき恵みは、見えない形で十分に注がれていることを、そのような状況にあって味わい、確信させて下さるためなのです。
　自分の置かれている状態に対して、決して不足を言ってはならないのです。神は私たち人間の思い通りに事をなして下さるお方ではありません。人間の思い通りに聞いてくださる神様なら、それは、人間の思いを中心としたご利益宗教の神様です。私たち人間にすべてのことが分からなくても、すべてのことを考え、人間にとって最もいい道を導いて下さっているのが神様なのです。ですから神様は「私の恵みはあなたに対して十分である」（Ⅱコリント 12：9）と言っておられることを思うと、あなたのことを考えて、神は、すべてのことを考えた上で、私を今の状況に置かれていると信じて歩みなさいと言っておられるのでしょう。
　信仰者は、預言者イザヤ（紀元前 700 年ごろに活躍した神の御言葉を取り継ぐ人）の叫びに耳を傾け、これを自分の霊的体験（目に見える結果がなくても、神が働いてくださっていると信じる体験）として、証しできるようになれば何と幸いなことでしょうか。彼はこう語りました。「天

よ歌え、地よ喜べ、もろもろの山よ声を放って歌え、主はその民を慰め、その苦しむ者をあわれまれるからだ」と。
　主はこの私の悲しみと叫びとを本当に知って下さっています。知って下さっているとは、神様は、ご自身のお心に沿って必ず導いて下さるということであります。この慰めが、信仰を強くさせてくれるのです。

小区分　　（１：５～25）
３日　１：８，９　神の支配

祭司の組は 24 組あったことは前回も見てきましたが、神殿における聖所の務めが当番制になっていて、各組に順番に回り、当番になった組は、その務めを一週間受け持つようになっていました。安息日が年に 50 数回であるが故に、各組には、年に２回ほどしか回ってきません。しかも、一つの組には、数多くの祭司がいるのですから、くじによって、主の聖所に入って香をたく（担当祭司の重要な務め）当番に当たるということは、生涯に一度あるかないかでありました。（この時代の歴史家ヨセフスの記事によれば、当時、２万人程の祭司がいたそうです。）

神は、時が満ちて、救い主をこの地上に生まれさせようと考えておられるその半年前に、救い主の先駆者（救い主が来られる前に先立つ人を遣わすとの約束がなされていました）となる者を誕生させようと計画しておられました。その親として選ばれたのがザカリヤとエリサベツの夫婦であったのです。そのために神は、祭司ザカリヤを、聖所に入る当番に当たるようにするために、当時はくじ引きで当番を決めていたのですが、その当番を決めるくじ引きの上にも、神は導きをお与えになったのです。

すなわち、ザカリヤにくじが当たるように導かれ、主の聖所の中に入るように導かれたのです。そしてそこへ、天使ガブリエルが現れるようにご計画なさったのです。こうして天使ガブリエルは、ザカリヤに、神のご計画によるヨハネ誕生について告げ知らされたのです。すべては神のご計画通りでありました。

くじ引きについて考えてみましょう。これは、確かに人間的な方法であり、幼稚なやり方であります。これがもっともいい方法だとはとても思えません。これ以外に考えら

れなかったのか、慣例になっていたと言うのです。このような不完全な幼稚な方法であったにもかかわらず、神はそのくじ引きの内に働きかけられて、ご計画を果たされたというのです。どのようなものさえも用いて事を進められる神の不思議さを思わされます。

最も、この世に完璧な方法などあり得ません。どんな方法でも欠陥があります。この当番祭司選定の慣例を真似たのか、イエス様が昇天された後、12 使徒（生前イエス様によって選ばれた 12 人の直弟子たちがいました。それを使徒と呼んでいます）の欠員を補う時に、（12 使徒のひとりユダがイエス様を裏切り、自殺した）ふさわしい２人を選んだ上で、くじを引いて決定しています。（使徒 1：26）そんな幼稚な方法で、大事な使徒選びを決定していいのだろうかと思わされるのですが、そのくじ引きをする時、こう祈っています。「すべての人の心をご存じである主よ。このふたりのうちのどちらを選んで、ユダがこの使徒の職務から落ちて、自分の行くべきところへ行ったそのあとを継がせなさいますか、お示し下さい。」（使徒 1：24，25）と祈ってくじを引いたのです。神が、この幼稚な方法であるくじをも支配して、神意を示して下さるようにと、まず祈っているのが目に留まります。

これらのことを思う時、たとえ幼稚な方法であっても、神がそのくじをも支配して導いて下さるようにと願い求めるなら、その幼稚な方法をも用いて、神はご自身の御旨を示し、正しく導いて下さると確信できるのです。

ここから見えることは、くじ引きに神意を期待するのではなく、くじ引きさえも用いて神意を示して下さる神に期待するのです。神に期待を置く時、神が必ず助け導いて下さると信じることが、キリスト教信仰だと言えます。

私たちの物事の決定というのは、深い洞察力によるというよりも、得てして、先がえないがゆえに、くじを引いて決めるようないい加減なものであることが多いものです。それだけ、物事を決定し、決断するというのは難しいことであり、どちらの方が神の御心に沿っているのか、決断に苦しむことが多いものです。だから、くじ引きのような方法を用いてでも、決断を下す助けにしたいと思うのが人間の常です。

どんな幼稚な方法であっても、神がその決定をさえも支配して下さるようにと、真剣に願い求め、信頼する心を持って向かっているならば、神は、その信仰の程度に応じて、必要に応じて導いて下さるのです。ですから、神が、必ずもっともよい道に導いて下さる、との強い期待と確信とを持って向かっているかどうかが、私たちに問われていると言えるでしょう。

小区分　　（１：５～25）
４日　１：10～12　恐れるな

ザカリヤは、幸運にもくじに当たったので、祭司を代表して、聖所の中に入り、香をたくという、重要な務めをすることになりました。これは、ザカリヤにとって、なんと名誉な出来事でしょうか。ザカリヤは落ち度なく執り行なわなければと、震える手で非常に緊張して向かっていたことでしょう。

その緊張しているザカリヤの傍に、今までその存在を聞いて知ってはいても、目で見ることなど考えられなかった、輝きに満ちた天使が、（天使がどのようにして造られたのか、聖書には記されていません。神だけがご存知です。神のお心を伝えたり、神の御心を実現したりするために遣わされたりする存在として考えることができます）急に目の前に出現したのですから、驚いたの何の、腰を抜かすほどだったでしょう。非常に驚いたばかりか、恐怖さえ感じたほどであったのです。

まずそこで思ったことは、私の務めにどこか落ち度があったのだろうか。私を叱責するために、天使がわざわざ出てこられたのだろうか。この驚きは、ザカリヤに非常な不安をもたらしたのです。真意が分からない時、人は恐れにも似た驚きを覚えます。マリヤの時（この後、1：28，29に記されています）もそうでありました。

私たちは、自分の信仰や行動に絶対の確信を持つということはなかなかできないものです。どこかに欠けがあるのではないかと不安を持っているものです。このような信仰でいいのだろうか。こんな信仰生活でいいのだろうかと。まして、輝く光に照らし出されると、ますますその不安が明らかにされ、恐れます。ザカリヤが天使ガブリエルを見て恐れたのは、このような不安が一気に押し寄せたからで

はないでしょうか。
　天使カブリエルは、その様な不安を覚えているザカリヤの心を思いやって、まず「恐れなくてもよい、よい知らせなのだ」と優しく言葉を掛けておられます。この言葉一つで、ザカリヤの心に平安が戻ったと思われます。
　私たちも、自分の情けなさや不出来さ、あるいは不信仰さを思って不安を覚える必要はありません。神はそのようなことで、私たちをお責めになることはないからです。かえって神は、「恐れなくてもいい」と優しく語りかけ、「そのままでいい、そのままで、ただ私に信頼を寄せて安心していればいいのだよ」と言って下さっています。
　そのことは、パウロ（福音の宣教者で、各教会に宛てて多くの手紙を書いて励ましたり、教えたりしている、神に用いられた伝道者です）がローマ書でこう語っている所から分かります。「だれが、神に選ばれた者たちを訴えるのか。神は彼らを義とされるのである。だれが私たちを罪に定めるのか。キリスト・イエスは、死んで、否、よみがえって、神の右に座し、また、私たちのためにとりなして下さるのである」と。（８：33，34）
　これは何と言う、愛に満ちた慰めでしょうか。このような神がいて下さり、また、とりなして下さるキリストがいて下さると言われているのですから、私はだれを恐れる必要があるでしょうか。また自分の信仰と行動に不安を持つ必要があるでしょうか。神がすべてをご存知の上で、私たちが信仰に生きるように導いて下さっており、助けて下さっているのですから、恐れず、不安を持たず、神に信頼して歩んでいけばいいと思わされるのです。
　もし、恐れたり、不安を持ったりするならば、神の与えて下さっている福音の慰めを無にしていることになります。

私たちは、「恐れなくてもよい」との神の慰めの声を心に聞いて、歩み続けたいと思うのです。

小区分　　（１：５～25）
５日　１：13，14　祈り

御使ガブリエルはザカリヤに対して、「あなたの祈りが聞かれた」と言いました。祈りが聞かれた！これは一体何の事かとザカリヤは思いました。思い当たることがなかったからであります。確かにザカリヤとエリサベツは、若い頃長い間、子供が与えられるようにと祈ってきました。始めは希望を持って祈り続けていたのですが、いつまで経ってもその祈りが聞かれず、子供が与えられませんでした。

年齢が進むにつれて、どうして自分たちには子供が与えられないのだろうか。自分たちの願いは、神の御心に適わないのだろうかと、自分たちにはもう子供が与えられないと思うようになり、老人になった今は、もうそのことについては祈ることもなく、あきらめた過去の事柄であって、考えることもしなくなって、ずいぶん昔の事になっていました。これは、18 節のザカリヤ自身の言葉からそのことが伺えます。

神様は、そんな人間の思いの逆をつかれるかのように、若い時の希望のある時には、その祈りをお聞きにならずに、人が諦め切ってしまった後に、その祈りにお答えなさるとは、皮肉なお方ではないかと感じさせられるのです。

しかし、神は意味なく意地悪をなさるお方ではありません。ここに神の深い御心があったと思われます。というのは、この先駆者（救い主が遣わされる前に、備える者として先駆者を遣わすとの神の約束が、預言によって語られています）ヨハネが、あくまでも神の御摂理（神の深いお考えとお計らい）と聖霊のみわざ（聖霊なる神のお働き）によってのみ生まれたものであることを明かにするためであったからです。

人間の限界を越えた所に、神のみわざをはっきり見るこ

とができます。旧約聖書の創世記に記されているアブラハムの場合がそうでありました。（創世記 18：10～12）人間の理性で理解ができ、あり得る範囲内においての事柄であるならば、たとえ、神がその祈りを聞いて下さったとしても、人間の目から見てもあり得ることなので、それが神のみわざとだと思うことができず、神様の驚くべきお働きを 100％讃えることにはなりません。

本当は、神は、人間の理性の考え得る範囲内においても、多くの驚くべきお働きをなしてくださっているのです。人間の祈りに答えて下さっているのです。しかし、それが人間の理解を超えた働き掛けであれば、神によるものだと分かりやすいのです。もちろん、人間の思い通りにして下さるというのではありません。その祈りに答えることが神様のお心に適っているものでなければ聞かれることはけっしてありません。

神様は、御思いに従って答えて下さるお方なのです。それ故、祈りが聞かれた事実を目の当たりに見た者は、神のお心に適った祈りであったことが分かり、それを喜びつつ、神を崇めずにはおられなくなります。

これらのことを考える時、祈りの内容を、理性の範囲内にとどめないで、理性の限界を越えた所にも神は働かれるということを、信じて祈っていかなくてはならないのではないかと思わせられます。もちろん、これが、神が聞いて下さるかどうか、神を試すためであってはならないのは言うまでもないことです。

もう一つのことは、以前祈り続けていたが、今はもう祈らなくなってしまっているような、私たちの無責任な祈りであったとしても、神は決して忘れられることなく、ご自身が定められた時が満ちるならば、その祈りに答えて下さ

るというのが分かります。これは何とあわれみ深い真実でしょうか。ただ神のあわれみという他ありません。
　今日の記事を見る時、一方では、いつか忘れてしまうような、いい加減な祈りをする人間の不真実さが明かにされているのと同時に、いつまでも心に留めて下さっている神の真実さがひときわ高く輝いて現されているのを見るのです。祈りが聞かれるというのは、人間の側の祈りの力や熱心さによるのではありません、神の真実なご性質による実なのです。それ故私たちは、神の真実による実を求める祈りをしていく時に、私たちの祈りが聞かれるのです。神の真実の素晴らしさに、ただ圧倒されるばかりです，

小区分　　（１：５～25）
６日　１：15～17　神の豊かなご計画

御使いガブリエルは、ザカリヤに対して、「エリサベツは男の子を生むのです」との信じられない言葉を語ったのです。ザカリヤにとって、到底信じがたいお言葉でありました。というのは、妻エリサベツが、もはや子供を生むことができる年齢ではなく、すでに老齢となっていたからです。しかもそれだけにとどまらず、その生まれてくる男の子ヨハネが、どのような使命を持っているのかを続けて語りました。その内容は次のようなものでした。

「神のご計画により、あなたがた夫婦に子供を授けられることになりました。この子は普通の子供ではなく、神からの特別な使命が与えられて生きるように定められています。それ故に、母となるように選ばれたエリサベツの体内に宿っている時から、すでに聖霊に満たされています。

この子の使命は、神が約束されていた救い主キリストの、先駆者としての務めを果たす事です。預言されてきたように、エリヤ（ＢＣ９世紀前半に活躍した預言者で、このエリヤのような、特別な使命が与えられた預言者が遣わされると預言されていました）の再来として、神から離れている民の心を神に向けさせ、キリストが来られる前の道備えをする役目だ。この子の使命を、あなたがたがよく理解した上で育てていかなければなりません。そのためには、この子はすでに聖別（神のものとして選り分けられていること）されていますから、ぶどう酒も強い飲み物も飲ませてはいけません。それは、神に身を捧げたナジル人（神のも

のとして、特別に選ばれた人のことを、こう呼ばれていた）だからです。」
　ザカリヤは、御使いの言葉を信じられない思いで聞いていました。「私たち老夫婦に、今になって子供が与えられるって？信じられない。また、その子が、救い主が遣わされる前に先駆者として遣わされる、預言されていたエリヤの再来であり、胎内にいる時から聖霊に満たされているとはどういうことか、御使いはどうしてこんな不可解なことを突然言われるのだろうか？」御使いの言葉は、ザカリヤにとって、一つ一つ信じ難いことばかりでした。
　御使いの言葉を聞いていて、ザカリヤは、その内容を全く理解できなかったのでしょうか。そんなことはあり得ません。彼も祭司として生きてきて、旧約聖書（新約聖書がまだない時代、当時は、今の旧約聖書しかありませんでした）の学びは欠かさなかったでしょうし、エリヤが再来することは、マラキ書４：５で（旧約聖書の最後の書）言われていることをよく知っていたのです。
　すなわち、メシヤ（ヘブル語で救い主の意）が来られる前に、エリヤの再来である預言者が遣わされることを堅く信じていたので、理解できないことではなかった筈です。ただそのエリヤの再来が、もはや子を望めない年代の私たち老夫婦に、子供として与えられると言われたことに対して、そのまま素直に信じることができなかったのです
　神は、ヨハネをキリスト（ヘブル語でメシヤという言葉は、新約においてはギリシャ語で書かれていますから、ギリシャ語ではキリストと言います）の先駆者として立てるために、まず父親となるザカリヤを導かれ、ねんごろに取り扱われるのです。自分たち夫婦の子として授けられるヨハネに与えられた神からの使命を理解し、認識して育てて

いく役目を与えられました。これが、ザカリヤ夫婦に与えられた大事な使命でありました。子ヨハネには、先駆者としての使命が与えられているのですから、その時が来るまで、ザカリヤ夫婦にはそのヨハネを預かり、育てていくという使命が与えられていたのです。

神は、綿密なご計画をもって、私たち一人一人に、それぞれに合った使命を与えて導いておられます。それ故、他の人と比較して、どちらが尊いとか言うべきものではありません。どれも、神の豊かなご計画の中に組み込まれている大切な使命なのです。それはあたかも、体のそれぞれの部分が、それぞれの使命に応じて働き、どれもが欠かすことのできない大切な働きを持っているように、それぞれが大切な使命を与えられているのです。それを信じて、一人一人が、自らの意志で進んで応答していくように期待されているのです。

私たちは、神が与えて下さった使命に喜んで向かう以外に、この地上において生かされている意味を見出すことができません。たとえ、小さく思える使命であったとしても、神の豊かなご計画の中に組み込まれて生かされているということは、大きな恵みであって、喜びであり、神にあって意義のある人生を送らせて頂いていると言えるのです。

小区分　（１：５～25）
７日　１：18　神の御言葉

神の豊かなご計画が、天使ガブリエルを通してザカリヤに告げられました。しかも、キリストの先駆者が、私たち老夫婦から生まれるとのお言葉に、あまりにも信じ難いその内容に、本当にそんなことがあるのだろうか？と彼の心に疑いの思いがよぎったのです。

この疑いはなぜ起こるのでしょうか？それは、御言葉を自分の視点からのみ考えて、神の視点に立って考えようとしないからではないでしょうか。もし、自分の視点から御言葉を判断していこうとするなら、神の御心を正しく受けとめることはできないでしょう。神の視点に立って聞こうとすることが大切なのです。

聖書に記されている福音の中心的な事柄を考えて見ても分かります。キリストの十字架と復活、そのみわざによってなされたあがない（人間の罪の身代わりに死んで下さることをあがないと言います）についてなど、何一つ正しく知ることはできなくなります。

これらのことは、すべて、神がどのような御心によってなされたことか。また、神が、私たちをどのように見て下さるのかということが最も大事な点であって、それが分からなければ、神のなさることや、お考えが何も分かってはいないことになります。

ザカリヤは、この時、自分の視点からしか考えられなかったので、どうしても疑いの思いを消すことができなかったのです。そこで御使いに答えました「どうしてそんなこ

とが私に分かるでしょうか。私は老人ですし、妻も年を取っています。」あなたが語って下さった内容は信じ難くて、それを御心として受け入れるようにと言われるのは、とても無理なことです、と言わんばかりに、神の御言葉に対して強い不信を現したのです。ザカリヤにとっては、実際に目で見るまでは信じ難い内容だったからです。

人間は、理性で納得できる理由と、目で見ることのできる保証を求めようとします。しかし、神がお与えになるのは御言葉だけです。この言葉が神の御言葉であるということが唯一の理由であり、保証であって、それ以外のものは何も与えられません。神の御言葉を、神のお心が明らかにされている御言葉であるからという理由だけで信じることが信仰であって、それは、「神は、語られたことを必ず成就される」という神への全面的信頼なくして持つ事の出来ないものなのです。

理性で納得できる理由や、目で見ることのできる保証という人間が持っている制約の中にある信じやすい事柄であるから信じるのではなく、真実な神の御言葉だから信じるのです、神の御言葉に対する向かい方はこのようなものでなければ、理性で納得できる理由や、目で見ることのできる保証が与えられるわけではありませんから、私たちは、決して神に信頼を置いて平安でおることはできないのです。

ダビデ（イスラエル王国の２代目で、ＢＣ1000 年頃の時代において、信仰深い王として活躍した人）は、神にこう祈っています。「主なる神よ、あなたは神にましまし、あなたの言葉は真実です。あなたはこの良き事をしもべに約束されました」と。（サムエル下７：28）これは、神の語られた約束は、この私にとって良きことであって、たとえ今、目に見える状態が良いように見えなくても、また、目

に見える保証がなくても、神の深いご計画の中で進められていることであって、信頼していきさえするならば、神のご性質が真実であられるから、神の語られたお言葉も真実であって、約束された通り必ず実現されると信じています、と祈りの中で告白しているのです。

　これは、すごい確信に満ちた祈りだと言えます。もちろんダビデがすごいと言っているのではなく、真実なる神様がすごいのであって、私たちも、約束して下さった通りに、神は必ず実現して下さるということを、本気で信じることができるのです。もし、ザカリヤのように、神の御言葉に信頼を置くことができなかったとしたら、一体私たちは、何にすがることができるのでしょうか。

小区分　　（１：５～25）
８日　１：19，20　信仰の修正

天使ガブリエルは、神といつも会いまみえ、神のお言葉を親しく聞き、その御思いをじかに感じ取っている存在でした。すなわち神は、人間をこんなにまで愛し、大事に思い、大きな犠牲を払ってまでも導こうとしておられるという神のお心を知っていました。

そして、人間救済のためのご計画を推し進めるために、私たち天使を用いて、ご自身の御思いを人間に伝えようとまでしておられる。にもかかわらず、こんなにまでして働いておられる神の深いあわれみのお心を、人間は信頼を持って応えることができず、平気で踏みにじっている姿を見させられるのです。こんな恩知らずの人間の態度に、天使ガブリエルは、憤りを覚えずにはおられませんでした。

神の御言葉に対する敬意のない、実際に見なければ信じようとしない唯物主義的な、あまりにも疑い深い不信仰なザカリヤの姿に対して、天使ガブリエルは、すっかり失望してしまいました。

神を敬って歩んでいるはずの信仰年数の長い祭司であり、又、伝えた内容も、何も厳しい裁きの言葉を伝えた訳でもありません。それどころか祝福の内容なのです。この御言葉は、ザカリヤにとっても、また人類にとっても大いなる喜びのおとずれなのです。神がどんなに人間を愛し、どんなに心を尽くしておられるかを痛いほど感じ取っている天使ガブリエルにとって、この喜びのおとずれを素直に受け入れようとしない人間に対して、憤りさえ覚えました。

ガブリエルは叫びます「あなたには、神の深い愛の御心が分からないのか。神は、愛の御心のためには、人の目に不思議と思えることであっても、言われた通りのことをしてしまわれるお方です。なのにあなたは、神にはその力がないとでも言うのですか。神は全能の神であられると共に、真実な神であられることをどうして信じられないのですか。

神が告げられたことは、すでに実現されたのも同じなのです。それは、神は真実であって、嘘をつくことができないお方だからです。神の語られたことを、自分の理性で判断できないから、理解できないからと言って退けたり、あるいは自分の好きなように曲げて解釈したりしてはいけません。それは、神の御言葉を拒むことなのです。神の偉大さを思い、素直になって聞けば理解できる事柄しか、神はお語りにはなりません」と。

それ故に神は、ガブリエルを通して、不信仰なザカリヤに対して一つの罰を与えられ、神の深い御心を悟る者となるまで、厳しい試練の中に置こうとされたのです。その罰として与えられたのは、神の御言葉に対する全幅の信頼を表すに至るまで、彼はおしにされたのです。

ザカリヤにとって、おしにされたということは、厳しい罰であり、苦しいことでありました。ましてこの時は、光栄な祭司の務めを果たしている最中でした。その務めを続けることができないと言う厳しい罰でありました。けれども、ザカリヤの信仰を修正されるためには通されなければならないことでした。

この信仰の修正が必要なのは、何もザカリヤだけではありません、すべての信仰者は、信仰生活の途上において、同じように経験させられることかあります。それは、時には厳しいものもあります。しかし、それを通されることに

よって、私たちの内側に、神の御言葉に対する全幅の信頼を寄せる信仰が形造られていくことになるのです。
　だから、神がそのために与えてくださる試練や罰を正しく受けとめ、素直に心を開き、正しい信仰へと修正されていかなければなりません。神は、私たちの現わす不信仰な姿を、忍耐をしつつ、私たちが御言葉に対して全幅の信頼を寄せて行くようになるのを期待しつつ、待って下さっているのですから。これは、神の忍耐深い愛というしかありません。

小区分　　（１：５～25）
９日　１：21～23　低くされた信仰

祭司が香をたくために聖所の中に入ると、民衆はその間、祈って待っていることになっていました。（10 節）しかし、いくら待っても祭司ザカリヤは、中からなかなか出てこなかったのです。一体どうしたのだろうかと民衆は不思議に思っていました。それは、聖所の中から出てきた祭司ザカリヤが最後にしてくれる筈の祝祷（旧約聖書の民数記６：24～26 にその例が書かれている。それは、神からの祝福がすべての人の上に注がれるように祈るのを祝祷と言います）を待っていたからでした。それが終わらなければ、礼拝が終わらないからです。

やっと現われたザカリヤは、何か様子が変で、何も語ることができず、ただジェスチャーで合図するだけでした。これを見た民衆は、ザカリヤが聖所内で幻を見、非常に驚き恐れて喋ることができなくなってしまったのだろうと察したのです。

この時のザカリヤの心の内はどうであったでしょうか。一生に一度あるかないかの大事な務めであったのに、神に仕える祭司という立場にあったにもかかわらず、御告げを信じることができないという、愚かにも、神に対する自分の不信仰さを現してしまったために、満足に務めを果たすこともできなかったことに対する悔い。それ以上に、信じ難いエリヤの再来としてのヨハネが、この私たち老夫婦に授けられるという御告げに対して、どうしても素直に信じることができずに疑ってしまった自分の不信仰さを思わさ

れ、自分が情けなくなっていたと思われます。
　今まで主の戒めと定めとを何一つ落ち度なく守り行って、誠実な信仰生活を送ってきたつもりでありました。また、主を信頼しながら、子供を与えて下さいとも真剣に祈ってきました。なのに、それからずいぶん年数がたち、老齢になったからと言って、偉大なる神を信じてきた自分の信仰的生き方が、何一つ神のすごさを信じる信仰を形造るものにはなっていなかったという事実を突き付けられたのです。
　すなわち、信じているつもりでいて、本当は、心の底から、神を神として崇めてはいなかったという自分の姿を見せられ、御言葉に対する信頼と、人知を超えた神の御力を信じる向かい方をないがしろにしていた自分の愚かさが根底にあったことを思わされ、自分の今までの信仰は何だったのだろうかと、ザカリヤは惨めな思いになっていたのではないでしょうか。
　彼は、彼に与えられた祭司としての大事な一週間の務めがなんとか終わると、そそくさと家に帰り、おしになってしまったことの次第を、妻エリサベツには筆談で伝えたことでしょう。それを聞いたエリサベツの驚きがどんなものであったか、分かる気がします
　それから 10 ヶ月間、彼は自分自身の不信の結果としておしになったことに不便を覚えつつも、このことを通して神に取り扱われ、神への信仰を新たにし、御使いガブリエルから伝え聞いた御告げをもとに、旧約聖書をひもとき、神はこれからどのようなご計画を進めようとなさっておられるかを瞑想したことでしょう。不信仰を示される経験をしたことによって、信仰とはどういうものか、信じるとはどうあることなのか、本気で神のお心を受けとめていきたいと考えるようになったのではないでしょうか。それは、

彼にとっては無駄な体験ではありませんでした。その体験を通して、多くのことを学習したのです。
　一つの御告げから、主が人類救済のみわざを、今にも成し遂げようとしておられることを感じ取ることができ、ザカリヤの心の内は、徐々に燃えてきました。こうして彼の、神への信仰は徐々に回復され、神は、人の計り知ることのできない大いなるみわざ（人類救済）を成し遂げられる、とのご計画に対して、今では信仰を持って、全幅の信頼を現わすようになっていたのです。
　そのことが、ヨハネ誕生の後に、罰が解かれ、口が開かれた時、1：68～79 の賛歌となってあふれ出てきたということからも、よく分かります。
　神の与えられた刑罰であった、おしとされた長い苦痛の体験は、決して無駄ではありませんでした。彼がその体験を通して自らの信仰のなさに気づかされ、信仰とは何なのかということを、今さらながら、本気になって考え直す機会が与えられ、どんな信じにくい状況であれ、御言葉に対して、全幅の信頼を寄せて信じていかなければならないという基本的なことをはっきりと示され、信じ切っていく信仰がどんなに大切なことかを思い知らされたのです。この信仰に立った時、ザカリヤの霊にいのちが吹き込まれ、生きた信仰として歩み出すことができたのです。
　ここから教えられることは、まず人は低くされ、自分の信仰心さえいい加減なものであることを知らされた時、私たちは、神の御言葉に全き信頼を置き、神をあがめること以外に何もないということを知らされます。この生きた信仰に立った時、信仰が形造られていくのです。
　自分は正しい信仰を持っていると自負しているその状態は危険です。人の信仰心ほどいい加減なものはないことを

よく知った上で、ただ主に信頼し、主をあがめることに心を向けていこうとする以外にないことを知らなければならないのです。

小区分　　（１：５～25）
10日　１：24，25　心のうめき

ザカリヤの妻エリサベツにとって、男の子を授けるとの御告げをどのように受け取ったことでしょうか。妻となった時から、母となりたいと願って真剣に神に祈ってきた昔でありました。時が流れ、その願いをすることは無理だと感じる年齢になったと悟った時から、その望みを全く捨て去って、その願いについて祈らなくなってからずいぶん時が経ったことでしょう。

それは、人間の祈りというのは、人間的に希望を持てる時だけとなりやすく、力ある神に祈っていながら、不可能だと思う年齢になったら、もう無理だと思わされ、祈らなくなってしまうものです。それが今、老人となって、母としての使命がまだあるのだということを御告げによって知らされ、こんな年を取ってから大丈夫なのかという不安と、それにも勝る驚きと喜びと神の不思議とを思って、心に波打たせていたことでしょう。

しかし、夫ザカリヤが、天使を目の当たりに見て、神からの御告げを受けたのに、あろうことか、神の御告げに対して不信を言い表したために、おしにされてしまっているという現実に触れることを通して、神の憐れみのお心を感じると共に、厳しさをも感じ取りました。

「神は、語られたことをかならず成就なさる。」このことが、エリサベツの信仰にも、崩れることのない永遠の真理としてしっかり刻み込まれたことでしょう。こうしてエリサベツは、こんな年齢になってから母となるということに

対する恥じらいと不安な日々を過ごしていました、始めはお言葉を信じるだけでありましたが、自分の胎内に子供が宿っているということを身に感じ始めた時は、何とも言えない歓びに満ち溢れたことでしょう。

若い頃の念願だった、自分たち夫婦の間に子供が生まれようとしている。しかも、それが何と、預言されていたキリストの先駆者となる使命を与えられた子が与えられると語られているのです。このことを思い巡らすと、エリサベツは、主に向かって叫ばずにはおられませんでした。

主は、私の心のうめきを知って、心に掛けていて下さった。それをこんな形でもって示して下さり、私の心を慰め、諦め切っていた母としての使命を、今与えて下さり、不妊の女という（当時の考え方において、神に呪われた者と見られていた）不名誉な呪われた名前から解放して下さいました。このような小さき者の心のうめきをさえ、心に掛けて憐れんで下さる神様。これが天地万物を造られた神様であり、宇宙を支配しておられる神様だと思うと嬉しくて仕方がありません。

小さな小さなありのような者の心のうめきをも聞きのがされないで、心に掛けていて下さるお方がおられるとは！ただ驚きであり感謝でありました。

主に信頼を置いている人の、心のうめきは、すべて神の耳にとどいて覚えられています。これが信仰を持つ人の慰めでなくて何でしょう。心にあるがままを神に向かって素直にうめき、神に目を注いでいるなら、エリサベツのように、かならず声を大にして感謝を叫ばずにはおれないようにして下さるでしょう。

たとえ、祈りが、神に届いているようには思えず、聞かれていないのではないだろうかと思えるようなただ中にあ

っても、失望する必要はありません。主はこの私たちに対しても間違いなく「私はあなたのことを心に掛けている。心配しなくともよい。」と言って下さっています。このような偉大な、力ある主が、こんな小さな私たちに目を留め、耳を傾けて下さっていると信じることができるのは、私たちにとって力であり、真の慰めとなるのです、ただただ感謝と言う他ありません。

小区分（１：26～38）イエス誕生の告知
11 日　１：26，27　信仰のきらめき

御使いガブリエルは、神の定められたこの時がくるのを今か今かと待っていました。（Ⅰペテロ１：12）いよいよ神は、その時が到来したことを示し、そしてそのみ告げを、一人の乙女に伝えるようにとガブリエルに仰せになりました。ガブリエルにとって、これから展開しようとする人類救済の一大ドラマが楽しみであったのです。

その最初の中心人物となる、神が示された一人の乙女とは、名もない貧しい、しかも、もうすぐ結婚しようとする婚約中のマリヤであったのです。それは、エリサベツに子供が宿ってから６ケ月目のことでありました。

どうして神は、救い主イエスの母親として、マリヤをお選びになったのでしょうか。彼女の信仰が特に優れていたのでしょうか。その理由は誰にも分かりません。神だけがご存じであります。

この時、マリヤは何才位だったのでしょうか。私たちはともすれば、現代の感覚で、二十歳を過ぎた女性だと考えてしまうものです。しかし、当時のイスラエルの人々の慣習では男子 18 歳、女子 13～15 歳が結婚適齢期であったとの事です。マリヤもその例にもれず、御子イエスを受胎するとの御告げを受けたのは 13 歳か 14 歳位ではなかったかと考えられます。

現代の感覚で考えるなら、まだ精神的には不安定な子供から大人への過渡期の頃であります。しかし、当時ではすでに大人だと見られており、信仰においても 13 歳で律法

のすべてを習い、律法を守らなければならない責任を負わされていた大人の信仰者だったのです。マリヤは、素直な、また純粋な信仰を持って神に仕え、神に喜ばれたいと願っていた一女性でありました、結婚を真近に控え、神の導きを求めつつ、婚約期間を過ごしていたと思われます。

この時のマリヤの上に、神のご計画されたことは、マリヤにとっては世界最大の祝福の内容でありました。しかしそれと共に、それは、最も厳しい試練の伴うものであったのです。まして、13 歳位の年少のマリヤにとっては、このような驚くべき御告げに対して、信仰によって判断し、応えなければならないという、それはそれは、大きな決断を迫られるものでした。

ザカリヤの時は、信仰者としての立場においては、長年祭司職にあり、指導者的立場にいました。夫婦共に律法に忠実に仕え、精神的にも、霊的にも成熟し切っていた老年期でありました。そんな、信仰的に秀でていた状態であったにもかかわらず、彼が神の御告げを受けた時に示した、あの不信仰な姿を現した光景を、鮮明に覚えている御使いガブリエルにとって、今度は、まだ年若い乙女が、この御告げを、神からの驚くべき御告げとして、どのような覚悟を持って、受け取る信仰を現すことができるのか、ひょっとしたら、ザカリヤが現したような、不信の思いを現して、失望を味わわされるのではないか、その嫌な光景が目に見えるようでありました。

しかし、ガブリエルの心配は取り越し苦労であったのです。御告げを受けた時、マリヤは、神のしもべとしての姿を守り通したのです。人は、信仰経歴や地位やその忠実さだけで、その人の信仰を判断することはできません。たとえ 13、4 歳位のまだ年若い、名もない乙女であっても、

神の御言葉が臨んだ時、神の真実に対する信仰がきらめくならば、神はそれを喜ばれるのです。

神が、マリヤを選ばれた理由は、もはや私たちの知るところではありません。けれども神は、人の目には不思議に思えることでも、この世の基準や判断に縛られることなく、世の始めからのご計画を、思わぬ形で遂行されます。その結果がマリヤの選びとなったのです。人間の知恵をはるかに越えた、神の知恵という他ありません。

現に、私のような名もない、何の取り柄もない者が、神に選ばれて、神の子にして頂いたという事実を考えるだけでも、神の選びの不思議さは、到底私たちの理解の及ぶところではありません。

この私に、神が選ばれるにふさわしい資質や、値打ちがあるとは到底考えられません。人間には誰一人、神に選ばれるにふさわしい資質や値打ちがある者は一人もいないのです。それ故、世の初めから、あなたもわたしも、選びの中に入れて頂き、神の子にしようとご計画して下さっていたという驚くべき事実を知った時、ただ神に感謝する以外にないのです。そして、小さな私の内にも神の御言葉が臨んだ時、神の真実に対する信仰が、少しなりともきらめくなら、神はそれを喜んで下さるに違いないでしょう。

小区分　　（１：26～38）
12 日　１：28，29　静かに待つ

神から遣わされた御使いガブリエルは、まだ若い乙女マリヤの所へ飛んで行きました。天からは全てが丸見えなのでしょう。探すこともなく、マリヤの所へ直行し、彼女の前に立ったのです。それが家の中であったのか、外であったのかはよく分かりません。またどんな風にしていた時であったのかそれも分かりません。何をしていたにせよ、マリヤが、神について何か思い巡らしていた時を選んだと考えられます。それは、ザカリヤが神殿での当番になった時を選ばれたように、というより、そうなるように導かれたのですが、同じように、大事な神の御告げを受ける態勢をマリヤに持たせるために、時を選ばれたことでしょう。

マリヤがまだ処女であったことがここでは強調されていますが、これは、まだ一度も子を産んだことのない者から、神の子が生まれるようにとご計画されたことが示されているのでしょう。

もっともふさわしい時に、ガブリエルが現れてこう言ったのです。「おめでとう。あなたは神から特別な恵みを頂いた幸いな人です。これまでお考えになっておられた、神の大切なご計画を遂行するために、神はあなたを選んで、あなたに臨まれました。あなたは恵まれた人です。神はあなたを包み、あなたと共にいて下さっています」と。

マリヤは、これが単なる挨拶の言葉ではないことをピンと感じました。一体これはどういう意味なのか、マリヤには何がなんだかさっぱり分かりません。もう間近に迫って

いる結婚が、主に祝福されたものになると言って下さっているのだろうか、それとも他のことなのか、マリヤにはさっぱり見当がつかなかったのです。

それもその筈であります。全く思いもよらない驚くべきことがマリヤに臨んでいるが故に、それは、マリヤが気づく事柄ではなかったからです。マリヤは戸惑いを覚えました。戸惑いを覚えつつも、御使いの語られた言葉を心の中で反復して考えたのです。

「恵まれた女よ、喜びなさい」とはどういうことか。また「主が共におられます」とはどういうことか。悪いことではないことが感じられるけれども、何か特別なことのように思える。しかしそれが何のことかよく分かりません。マリヤは戸惑いを覚えつつも、なお続けて語ろうとしておられる御使いのお言葉を待ちました。

私たちには、神の御心を知り得ないことが多いものです。神の御心を知り得ないが故に、ともすれば信仰に動揺を覚えるのです。こういう場合、自分勝手に解釈してしまうか、このことから目をそむけてしまいやすいのです。しかし、神の御心が分からない時にしてはならないことは、自分勝手な、自分流に判断してしまうことです。分からない時は戸惑いを覚えますが、それが明らかにされるまでは、静かに待たなければならないのです。もちろんすぐに示されるとは限りません。長い年月を要することだってあります。

戸惑いは決して不信仰なのではありません。自分の思いで早呑み込みをし、神の御心を誤って受けとらないことの方が大切であります。ペテロという使徒は、第２の手紙３：16 において、こう言っています。「無学で心の定まらない者たちは、無理な解釈を施して、自分の滅亡を招いている」と。神の御心を間違って受けとめてはならないのです。

　神の御言葉の真意を知り得ない時は、あせってはなりません。神があわれみをもって教え示して下さる時が来るまで、御言葉を静かに待たなければなりません。神は必要な時に、必ず明確に示して下さるからです。待つことを学ぶのも信仰の大事な事柄の一つです。神が最もよい時を選んで示して下さるでしょう。

小区分　　（１：26～38）
13 日　１：30～34　不信と疑問の違い

突然の御使いの出現だけではなく、その語られた挨拶のお言葉の意味が分からずに戸惑いを覚えているマリヤを見て、御使いガブリエルは優しく語り続けます。「あなたが戸惑いを覚えるのは当然かもしれません。けれども、決して恐れる必要はありません。あなたは神からの特別な恵みを頂く者として選ばれたのです。あなたは、これから男の子を産むことになります。その子にイエスという名をつけなさい。この子は昔から約束されてきた救い主であり、ダビデ王位を継ぎ、イスラエルを治められるのです。そしてその支配は永遠に続くのです。

マリヤは、聞く前にびっくりして、聞いてまたまたびっくりしました。これは何という御告げでしょうか。一体この私の上に何が起ころうとしているのか。人々が待ちに待った救い主が、この私の子としてお生まれになるとは、何ということだろう。これは夢ではないだろうか。何かの間違いではないだろうか、もしこれが現実ならば、何という幸いなことだろうか。夢なら覚めないで欲しいと願った。その時ハッと我に帰ると、これは将来結婚してからみごもるということではなく、御使いは、今のことを言っているのではないだろうか。とすれば、婚約はしてはいるが、まだ結婚をする前に子供が生まれるということが有り得るのだろうかと思い、マリヤは御使いに問うて言ったのです。「私はまだ結婚もしていませんのに、この私から子供が生まれるというのは何かの間違いではありませんか」と言い

ました。これは人間として当然の疑問でした。
　御使いガブリエルは、マリヤのこの疑問を、不信の言葉とは受け取りませんでした。ザカリヤに御告げを示した時、ザカリヤの発した言葉（1：18）を不信仰な言葉として、刑罰を与えられたのですが、同じ御使いが、このマリヤの言葉を聞いて、どうして不信仰な言葉だと見られなかったのか不思議です。
　しかし、その言葉の奥に込められている思いを良く考えてみると、ザカリヤの言葉には、「そんなことが起こる筈がない。どうしてそのようなことを信じるようにと言われるのですか」との不信の思いがありありと出ていました。心の中にある思いを読み取ることができた御使いには、それは不信仰な言葉だと判断したのです。
　それに比べて、マリヤの言葉は、「私はまだ男の人を知らないのですが、それでも、そのようなことが有り得るのですか」との素直な心から出た疑問であることが分かります。
　ここに、不信と疑問の違いがあるのを見るのです。神は、決して私たちに、疑問を抱いてはならない、ただ黙って従うようにと、盲信を迫られるお方ではありません。なぜなら、盲信は真の意味での信仰ではなく、いつかは色あせて、消えて行ってしまうからです。神は、必ず人が理解できるように説明して下さるお方であります。それが意味のある言葉であるが故に、その言葉を信じるか信じないかが問われるのです。
　不信の思いを持って神の御言葉に接する時、そこには何も起こりません。ただ失望があるだけです。しかし、信じたいと願いつつも、その真意が分からずに生じてくる疑問は、素直にそのまま疑問として神の前に出せばよいのです。無知は不信仰ではありません。しかし、無知に平気になる

ことは不信仰です。神のお心を知りたいと飢え渇く心が大事です。それが信仰なのです。そうすれば、神は必ずその疑問を解いて下さるでしょう。分からないのに分かった振りをしてはいけません。

何の疑問も起こらず、素直に御言葉を信じ受け入れることができる人は、受け入れればよいのですが、疑問を持ちながら、分かった振りをして、信仰者らしく見せようとするのは偽善です。肉の世界に生きている私たちにとって、霊の事柄に触れる時、いつもスッと受け入れることができるとは限りません。

このような場合、私たちは、真実な神が語られたお言葉を喜んで信じたいとの思いを持って向い、その時、疑問が生じる時、それをありのまま神に問い続ければよいのです。ありのままでいること、これはいつの時でも大切なのです。

小区分　　（１：26～38）
14 日　１：35～37　神の全能

不信の思いからではなくて、自分の内に生じてきた疑問を隠さずに、素直に問いかけたマリヤに対して、御使いガブリエルは、その問いに分かりやすく答えたのです。それは、神の子イエスは、人の形を取って神秘的な誕生をするように、聖霊があなたに臨み、あなたの子として生まれるようにされたという、神のお心を教えられたのです。「あなたがまだ男の人を知らないからこそ、そのあなたに聖霊が臨み、いと高き神の御力があなたを包むのです。ですからあなたから生まれ出る子は、肉によったもの（人間的な誕生）でないが故に、《聖なる人》であり《神の子》と呼ばれ得るのです。

これは、神による神秘的な働きかけであり、信じにくい事柄ですが、神がそのようにご計画なさったのですから、何一つ間違いはありません。あなたのために、神によってなされた不思議について教えてあげましょう。あなたの親族に当たるエリサベツは、すでに老年となっており、しかも不妊の女だと言われていたにもかかわらず、神の驚くべきご計画によって、今はもう胎内に子を宿して６ヶ月になっているのです。このように、どんなに不可能なことのように思えるようなことでも、神がご計画なさるならば、それは必ずその通りになります。神にとってできないことは一つもないからです」と。

御使いガブリエルの懇切丁寧なお言葉を聞いていて、マリヤは気持ちがすっきりとし、そして思いました。「神にと

ってできないことは一つもない」。今まで当然のように思って信じてきたこの信仰の事柄が、いざ自分の問題として迫ってくると、「まだ男の人を知らないのにそのようなことが起こり得るのだろうか」との疑問が内に湧き起こってきてしまった。信仰を持っているようでいて、いざという時には、自分の内に、その信仰が育っていなかったのを強く思い知らされたのです。「神にとってできないことは何一つない」ということを、今そのまま信じることができるか、そのことが強く迫られていると感じました。マリヤはこの時に本当の意味で、素直に信じたのです。

今日において、神を信じる者は、事柄は異なっていても、マリヤと似た経験をさせられることがあります。「神にとってできないことは何一つない」。この当然のごとき信仰の前提が、いざ自分の問題として迫ってきた時、どこまで素直に信じることができるか。しかも、これを人間の願望を満たすために、神を利用してこう言うのではなく、自分にとって好都合になるか不都合になるかということを全く離れて、神がご計画なさったことで、「神にとってできないことは何一つない」と言い得るかどうか、私たちに問われるのです。神にとってできないことは何一つないと言えないなら、それは信じる必要のある神様だとは言えません。

この意味で、私たちの日毎の生活において「神にとってできないことは何一つない」という信仰を持って、神の御言葉に従っていると言えるでしょうか、建て前の言葉でではなく、本音でそう言えるでしょうか。この信仰を失った時、私たちの信仰は、ただ自分の願望中心の肉的（人間的）信仰になってしまうのではないでしょうか。

今日においても、御使いガブリエルは、私たちの目には見えなくても、同じように語りかけておられます。「神のご

計画なさったことは、必ずその通りになる。神にとってできないことは何一つないのだから」と。

私たちも、そのような信仰の迫りに対して、アーメン（その通りですとの意味）と答える時、私たちのうちに平安な思いが、波のように押し寄せてくるのです。もし神が、全能なる神でないとしたら、私たちはちっぽけな神様を信じていることになります。神様はそんな小さなお方ではありません。もし何もできない神なら、信じる必要はどこにもありません。神のお心に適ったことなら、神は何でもなさることができるお方だと信じる。これが、聖書に記されている神様を信じる信仰なのです。

小区分　　（１：26～38）
15日　１：38　純粋な信仰

マリヤは疑問を持ちました。しかし、その疑問に対して答えてくださった御使いガブリエルの言葉を聞いていて思ったのです。「そうだ！神にとってできないことは何一つないのだ」。彼女の心に、この確固たる信仰が充満したのです。御使いが教えてくださったように、子供を生めなくて老年を迎え、人々の中傷の言葉にもじっと耐えてこられた、あのエリサベツさんが、神の御計画によって子をみごもり、すでに６か月になっているということを聞いては、何一つ疑う余地がない。そう思ったマリヤの口から出る言葉は一つでありました。

しかしその時、一瞬頭によぎる思いがあったのです。「今私が子をみごもるなら、この子は私生児と呼ばれ、私は姦淫の女として、結婚が破談になるだけではなく、石で打ち殺されてしまうのではないだろうか（当時の信仰者にとって旧約の律法は大事なものでした。その中には、そのような罪を犯した者は、石打ちの刑に処するようにと記されていました。申命記 22：23，24）。マリヤはそのこともよく知っていました。

マリヤは、この時大きな決断を迫られたのです。その時、マリヤの心に起きた恐れの思いを覆ったのは、「神がなされることに何一つ間違いはない」という信仰でありました。

もはや、マリヤの言うべき言葉は一つしかありません。「私は主のはしためです。神のご計画通りにこの身になりますように」と言いました。これは、全き服従を示す言葉

でありました。どんな事が起ころうとも、神がすべてをお考えになった上で、最もよいこととして決められたことですから、その通りにしてくださいと告白したのです。御心通りになりますようにと告白する服従を、神は期待しておられました。マリヤは、その期待に応えて告白したのです。

このマリヤの言葉を聞いて、使いに立った御使いガブリエルは安堵を覚え、使命を果たすことができたことの充実感を覚えつつ、マリヤのもとを離れて行ったのです。

マリヤは、あの驚くべき御告げを、どうしてあのように簡単に受け入れることができたのでしょうか。あれほど信じにくい事柄であり、また自分にとって非常に不都合なことだと目に見えているのに、素直に受け入れることができたのはどうしてでしょうか。この箇所では、マリヤの両親のことが何も触れられてはいないのでよく分かりませんが、マリヤは、このことを両親に相談したのでもありませんでした。もしこれを両親が知ったなら、目を回したに違いありません。人に相談することもなく、瞬時に反応して、信仰を現したのです。

13 歳前後であったと思われる乙女が、信仰的一大決心を、いとも簡単にやってのけたのです。いや、13 歳前後の乙女であったからこそ、かえって純粋な心を持ってやってのけることができたのだとも言えます。

もちろん年齢だけの問題ではありませんが、純粋な信仰であったが故に、いろいろなことを思い煩ったり、疑ったりする思いよりも、神に信頼する思いの方がより強かったのです。私たちの信仰においても、いつも心の内で、この２つの思いが戦っています。神に信頼を寄せる思いが強ければ強いほど、信仰は純粋にされていきます。この純粋さを大切にしなければなりません。この純粋な信仰を持つこ

とによって、初めて「御心通りになりますように」と全き服従の信仰を現すことができるのです。これは人間的純粋さではなく、偉大な神の御前に、純粋に受けとめる信仰に立たせて頂けるのです。これが信仰なのです。

小区分　（１：39～56）
（マリヤ，エリサベツを訪ねる）
16日　１：39、40　真の交わり

御使ガブリエルが立ち去った後、マリヤは、御使いの語った言葉を心に思い浮かべていました。「この私が、昔から約束されていた救い主の母親として選ばれたとは、こんな驚くべき御告げを、天使から直接聞いたということを、誰が信じてくれるだろうか。夢でも見ていたのではないかと言われても仕方がないほどの考えられない出来事でありました。自分でも、現実なのかと疑うほどだったでしょう。

マリヤは、このことを両親に知らせるでもなく、婚約者であったヨセフに知らせるでもなく、今、一番理解し、共に喜んでくれると思われる人として、天使が教えて下さったエリサベツのことを思い浮かべたのでした。

マリヤは、そう思い立つと、取るものも取りあえず、遠い地に住む、親戚でもあったエリサベツの住んでいる、山地にあるユダの町へと旅立ちました。エリサベツの住んでいた所が何という町であったか明確ではありません。ある人は、ヘブロンの南９キロに位するユタだと言い、ある人は、エルサレムの西６キロ半に位するアイン・カリムの町だと言います。どちらかはっきりしませんが、どちらにしても、マリヤの住んでいるナザレからは、遠く 150 キロ余りも離れた山地の町でありました。これは非常に長い日数を要するばかりではなく、一人では危険な旅であることが分かっていました。

しかし、マリヤの心の中には、主の守りがあることを信

じていましたから、何の恐れも、障壁も感じないほどに、御告げのことを話して共に喜び合い、慰め合いたいとの強い思いに、霊が燃えていたのです。
　このことを書き記している著者ルカも、その旅が大変であるということを何一つ記そうとせず、マリヤの心がエリサベツのもとへ飛んでいたことに目を向け、すぐマリヤとエリサベツが相まみえたことに筆を進めています。
　エリサベツの家に行くまでの途上の数日間、マリヤの心には、御使いから聞いたお言葉だけが心の中に響いていて、それ以外何も考えられず、時が経つにつれて喜びが増し加わってきました。余りにも信じ難い事柄であっても、それが御心だと信じて、一旦受け入れるならば、その内容の凄さに改めて感動し、更に大きな喜びとなるのです。
　遠来の客マリヤの到来に、エリサベツの喜びもひとしおでありました。余りにも信じ難い神の導きを受け入れた者同士として喜び合い、深い慰めが与えられる時を持つことができたのです。
　私たちクリスチャンは、自分の罪の深さを悲しみ、その罪の赦しが、キリストの十字架にあることを知って、涙を流しつつ十字架のもとにひざまずいた者であります。その私たちが、同じ恵みの経験をした者と相まみえる時、そこには深い慰めを得ることができます。このような者の集まりが聖書で言う教会（建物のことではなく、信じる者の集まりのことを教会と言います）です。
　十字架の恵みがどんなに素晴らしいものかを知った者は、十字架の恵みが分からない者とは、本当の交わりを持つことはできません。共に十字架のもとにぬかずいて喜びを受け取る時、そこに始めて真の交わりを持つことができます。
　エリサベツとマリヤとの交わりは、信じられないほどの

神の恵みのお心を経験し、その御告げのすごさに圧倒された者同士として持つことができた、真の交わりでありました。年齢も、付き合いの少なさも関係なく、そこには、神が中心にいて下さるという素晴らしい交わりだったのです。

又、真の交わりを持ちたいと願う者は、どんな障害をも苦にならないものであることが、このことからも分かります。それは、真の交わりを通して受ける恵みが分かっているので、何としてでも交わりを持ちたいと思って、どんなことにもまして、神が中心にいて下さる交わりを最優先させようとするから、神もその交わりを祝福して下さるのです。この事が分かった人は幸いです。

小区分　　（１：39～56）
17日　１：41～45　聖霊による感動

遠いナザレの地からはるばるとやってきたマリヤを、心から迎えたエリサベツでありました。実はエリサベツ以上にマリヤの来訪を待ち望んでいた者がいたのです。それが彼女の胎内にいたヨハネであったと言うのです。まだ妊娠６ヶ月過ぎでありました。人間として生まれるまでには未成熟であったと考えられるのに、一人の人間のように、胎内にあって喜び踊りつつ迎えたということを著者ルカは伝えているのです。

この時に、何と驚くべき光景が展開していたことでしょうか。６か月過ぎの胎児であっても、聖霊が臨んで、まだ形もない胎児イエスを感じてほめたたえ、その母親マリヤを歓迎したというのです。こんなことが考えられるでしょうか。こんな所に、神のなさる不思議があります。このことが一体何を意味するのか、著者ルカはその意味するところを感じ取って書き記したのだと思われます。

すなわち、胎児ヨハネは、エリサベツの胎内にいる時から、すでに聖霊に満たされている（１：15）と記されていることを明らかにしようとしたのでしょう。胎児ヨハネは、イエスの母となるマリヤの声を聞き、私の主人となるお方の母であることを知って、聖霊による感動を覚えたのです。胎児ヨハネのその思いを感じ取った母エリサベツも、聖霊の感動を覚えて叫ばずにはおれなかったのです。

「救い主の母となられるとは、あなたはすべての女の人の中で最も祝福されたお方です。そして、あなたの胎内に

いるお子様は、神の祝福を持って来られるお方です。救い主の母上となられるあなたが、私のところにおいで下さったとは何と幸いなことでしょう。あなたの声を聞いた時、私の胎内にいる子が喜び踊って、あなたが主の母となられたことを現しています。主の御告げを、語られた通り実現されると信じたあなたは本当にお仕合わせな方です」と。

聖霊の感動を受けて、このように素直に語り得た老齢の信仰者エリサベツのへりくだった信仰が、ここにおいて感じられます。

エリサベツは、名門の出である祭司の妻で、長年信仰人生を積んできた老齢でありました。かたやマリヤは、名もない貧しい家庭の 13 歳前後の乙女であります。しかし、エリサベツは、そのような地位や年齢など気に留めることもなく、ただ霊的な置かれた立場を重んじて、「私のような者のところへ来て下さるとは」と、年若いマリヤに向かって言ったのです。なんというへりくだりでしょうか。聖霊による感動が与えられたなら、このように心が低くされるのでしょう。しかも、これは単なる人間の感情に訴える感動ではありませんでした。それは主の御心が、霊に響いてくるところの聖霊による深い感動でありました。

これは、エリサベツだけの特殊な体験なのでしょうか。ただ人間の感情に訴える感動は、主の御心とつながらなくても起こり得るのです。しかし、聖霊による感動は、主の御心とつながらずして有り得ません。主の御心に心を打たれた時には、信仰者の内に、必ず聖霊による感動が起こるものだと言えるでしょう。

とすれば、これは特殊な体験ではなくて、私たちにおいても、主の御心に、あるいは主の愛に打たれる時に起こる感動は、人間の感情によるものではなく、聖霊によるもの

であると分かるのです。そうであれば、聖霊による感動なくして、主の十字架を仰ぎ、喜ぶことができないのですから、誰一人、聖霊による感動がなくして主の御救いにあずかることができないはずです。

人は、感傷的な心で、キリストの十字架を見ることもできます。しかし、聖霊による感動に迫られない限り、キリストの十字架に示されている、神の激しいまでの愛は、決して分かりません。そして聖霊は、その感動を与えようと一人一人に忙しく働いておられます。

エリサベツの内に働いていた聖霊が、同時にマリヤにも働いていたように、時を越えて今の私たちにも働いて下さっています。又、聖霊による感動が与えられることによって、主にある者同士の交わりが高められていき、一人一人はへりくだらされていくのです。

小区分　　（１：39～56）
18日　１：46，47　主への賛美

旅の間中、マリヤの心に去来していた思いは、神のあわれみとその御告げのことのみでありました。長い道中も守られ、そしてエリサベツの家に着いて、聖霊に満ちたエリサベツの祝福の言葉を聞き、マリヤの心には何とも言えない喜びが全身に湧き上がり、主をほめたたえ、主に感謝せずにはおれませんでした。

その時、マリヤの口からついて出てきたものは何という素直な神への讃美であり、何という素直な喜びに溢れた告白でしょうか、キリスト者に与えられている大いなる特権がここにあるのです。

マリヤの讃歌と呼ばれている１：46～55は、サムエル記上２:１～10にあるハンナの讃歌に文体がよく似ており、詩篇などからも反映していると言われています。しかし、だからと言って、マリヤがただそれをまねて歌ったというのではありません。そのことから、かえってマリヤが旧約聖書に親しんでいた人であり、神のお言葉を重んじて口ずさんでいた人であったことが分かります。

全部がその人の創作でなければ信用できないというのは、信仰の事柄においては考えるべきではないでしょう。それどころか、旧約の内容がそこに反映していると言うことは、マリヤの信仰が旧約聖書の信仰に基づく忠実な信仰であったことが裏付けられていると言うことができます。すなわち、日毎、神が、この私に何を語り掛けて下さっているのかを聞くために、御言葉を心に思い浮かべ、瞑想する時（世

の思い、世の事柄から離れて、静かな時を持ち、神の御声を聞こうとして、思いを神様に向ける時を持つこと）を多く持っていたことが分かります。

それ故に、神のあわれみを感じ、その御告げを聞き、霊の迫りを受けた時、マリヤの心に、電光のごとくに閃きが与えられ、神が語って下さった御告げはあのことなのだと、これまで思い浮かべてきた御言葉が、走馬灯のように描き出され、それを思い起こしながら、それを基にして、自分の中に起こされた心からの讃美として歌い出したのです。

新しく作り出すことだけがいいのではありません。神の御言葉の価値は古びることなく、朽ちて無意味なものになってしまうことはなく、真理としての価値を、決して失わなうことはないからです。神の御言葉を基にして、それを自らの讃美として歌う時、その讃美は、真実な讃美となり、新しい、しかも自分の内から溢れ出た讃美であると言い得るのです。もちろん、マリヤがそのすべてを理解して歌ったとは言い切れませんが、そこにも神の導きがあったので、このように、神のお言葉として残されているのです。

この事が分かると、私たちも、自分の思いによらない、神に対する真実な讃美ができるのです。神の御言葉を基とした、神の導きを受けた自由な讃美ができるのです。

それではマリヤの賛歌を見ていくことにしましょう。まずマリヤは、主をあがめ、喜び称えました。主のあわれみが私に注がれているということを体験した者の口からついて出てくるのは、主をあがめる言葉であります。詩篇の記者たちも、言葉の限り主をほめたたえています。（一例として詩篇 145：1～3「わが神、主よ、わたしはあなたをあがめ、世々限りなくみ名をほめたたえます。主は大いなる神で、大いにほめたたえられるべきです。その大いなるこ

とは測り知ることができません。」など）

心の限り主をほめたたえることができる人は幸いな人です。主のあわれみがその人の霊から離れることがないからです。又、主をほめたたえている時、私たちの霊性（神と向き合うことができる霊の機能が十分に働くようになること）は整えられ、喜びが溢れてきます。人間的に証明できない不思議なことですが事実です。やはり、神の御前にあって、神をほめたたえることが最も人間にふさわしいことだからなのでしょう。

マリヤは、神を救い主としてたたえました。神が人間に向かって立っておられるのは、人間の魂を愛し、その魂を救い出そうとする救い主として立っておられるのです。このことを知って主をたたえずにはおれなかったマリヤの気持ちが伝わってくるようです。又これを、信仰を持って書き留めた福音書記者ルカの気持ちもよく分かります。

小区分　　（１：39～56）
19日　１：48　目を留めて下さる神

この箇所は、マリヤが主をたたえているその理由を歌っている内容です。マリヤは観念的に、主を讃美したのではありませんでした。主をたたえずにはおれない個人的な深い理由があったことを表明しています。「この卑しい女をさえ、心に掛けて下さった」と歌っています。

この時のマリヤの心は、次のたとえを持って示すことができるでしょう。立派な作品が多く展示されている会場に、貧弱な一つの作品があった。だれもが目を留めずに通り過ぎて行くような作品であった。しかし神は、そのような貧弱な作品に目を留めて下さり、その前に立って、これだ！これが私の選んだ作品だ！と言って下さった。このような形で目を留めて頂いた者の喜びは、どんなに大きいことでしょうか。「本当に、こんな貧弱な私という作品が、尊いあなたの御目に留まったのですか？」と考えられないような神のあわれみの御思いに、マリヤは、ただ驚きつつ感謝するばかりでありました。

今日の私たちに対しても同様です。神は、つまらない、取るに足らないと思える者に目を留めて下さり、ご自身の内に満ち溢れている恵みを、惜しげもなく注いで下さるお方なのです。マリヤがこのことを、心の底からの喜びの叫びとして歌った時、マリヤの心に、主の恵みが流れ込んできて、一杯に満ち溢れたのです。

マリヤは、こんな私に目を留められて、神は後悔なさらないのだろうか、とそんな心配はしませんでした。こんな

私を、最も幸いな者にして下さった。こんな感謝なことはありません、とその霊的な事実に、ただただ感謝の思いを抱き、主をたたえただけでした。

自分が、いかに取るに足りない者でしかないと思っていたとしても、神の方が目を留めて下さったのですから、私たちの側は、もちろん何の異議を挟む必要もないのです。ただ、神の恵みを素直に喜んで受け入れるだけです。そうすると、主はこんな私を、こんなにも幸いな者にして下さったという喜びの思いから、主をたたえずにはおれなくなってくるのです。

私のような者が、とてもそんな資格はありませんと言って、いかにも謙遜そうに見せて、卑屈な様を表すなら、注ごうとしておられる主からの恵みを受け取れず、主をたたえる心が湧き上がってはきません。ここに大きな違いがあります。卑屈な様は、せっかく注ごうとしておられる主の恵みを無駄にしてしまいます。こんな者にさえ目を留めて下さるお方がいて下さるという、神のあわれみの大きさを思って、素直に感謝することが最も大切なことなのです。

こんなつまらない者と言いつつ、それは口だけで、心の内ではそのように思ってはいない、形だけの人もいますが、神はそんな人を受け入れられる筈がありません。心底、自分のつまらなさを知り、神はこんな者さえも目を留めて下さって「わが子よ」と呼んで下さっているという事実を知ったならば、感謝に溢れてくるのです。感謝に溢れることなくして、神の御前に歩むことはできません。

素直に喜び、素直に感謝する時、私たちの内には神から注がれる恵みが満ち溢れて、主のあわれみの心が理解できるのです。

小区分　　（１：39～56）
20日　１：49，50　主を畏れる者

マリヤは、自分のような者の上に目を留めて下さった神のあわれみをたたえ、これは私個人に起こった大いなる事柄であるが、それだけではない、主を畏れ敬うすべての人々にとっても、すべての時代における人々にとっても同じであって、主のあわれみは決して尽きることはないと歌い綴っていくのです。

主を畏れる者とは、主の御前に“参りました”と言ってひざまずく者、自分の内に主張すべき事柄を持たない者、神の御前に、そのお言葉の前に、神の権威とその主張とを認めて「ハイ」と従う者、これが主を畏れる者であります。そんな主を畏れる者の上には、主のあわれみがとこしえに尽きることがないと歌っているのです。

主を畏れるという信仰は、旧約、新約を通じて、信仰の中心的な事柄の一つとして記されています。主を畏れる心があるかないかによって、その人の信仰が主からのものか、人からのものか見分けることができます。それ故、箴言では「主を畏れることは知恵の始まり」だと言っています。

マリヤは、主を畏れる人と言って、どのようなことを心に思い浮かべていたのでしょうか。マリヤは、先祖の信仰者たちのことを思い浮かべていたと思われます。特に信仰の父と呼ばれているアブラハムのことを思い浮かべていたことでしょう。

アブラハムにとって、神が約束して与えて下さった自分の愛する一人子イサクを、目に入れても痛くない程大事に

思っていたイサクを、燔祭（すべてを神のものとしてささげる儀式）としてささげよとの神のみ声があった時、アブラハムは大きなショックを受けました。非常に厳しい信仰の試練に立たされたのです。（創世記 22：1～14）老齢になってから神が与えてくださった、自分にとって、今最も大切に思っている愛する子イサクを、燔祭としてささげよと言われたことによって、主のお言葉を取るか、子供の方を取るか迫られたのです。それはあまりにもむごい迫りでありました。神と子供とどちらが大事かと迫られたからです。このことを通して、主を畏れる者であるかどうかを試みられたのです。

このような厳しすぎる試みに対してアブラハムは、何と神のお考えに間違いがあるはずはなく、深いお心があるのだろうと信じ、そのお言葉通りに聞き従う信仰を現したのです。何と驚くべき決断をしたことでしょうか。彼が、いかに神を畏れる者であったかが、このことからよく分かります。彼は、ささげる場所にまで連れて行き、神に言われた通りイサクをくくり、祭壇に乗せ、刃物で殺そうとしたのです。するとその時に、天から声があって、「わらべに手を掛けてはならない。あなたが神を畏れる者であることが分かった」との神の語りかけを聞いたのです。

大きな矛盾を感じつつも、神の主権（神の完全なお心に間違いはなく、最高、唯一、絶対の権力を持っておられる）を認めて、神のお言葉に、ただ「ハイ」と従うことが、神様の導きを頂いて生きてきた自分の人生であると認めて歩んできた者の、現すべき行為であると受けとめていたアブラハムであったことが、その姿に現れていたので、それを見て、神は「あなたが私を畏れる者であることを見た」と認められたのです。

主を畏れる者とは、こういう姿を現す者のことを指しています。私たちには、このような大きな試練が与えられるとは限りません。けれども大切なのは、試練の大きい小さいではなく、どのようなことに対しても、神は正しく、何一つ間違いを犯されることのないお方、私たち人間には不可解に思われることがあろうとも、そこには神の深いお考えが必ずある。そう信じて、御言葉の主権を認めて「ハイ」と従っているかどうかが見られているのを知らなければなりません。

マリヤ自身、アブラハムの信仰に学び、主を畏れるという事がどれ程大切なことであるかを心に刻んでいたのでしょう。だから、マリヤも御告げを聞いた時、普通ならば、考えられないこと、おかしなことと思える部分があった御告げであったにもかかわらず、神の御言葉の主権を認めて「おことば通り、この身になりますように」と答えたのです。その素直な信仰に心を打たれます。

マリヤの心を捉え、そして歌わずにはおれなかった「主を畏れる者」に対して注がれる神のあわれみは、真実であります。私たちも、神のなされること、語られることに対して不平不満を持ったりせず、不可解だと思ったりせず、神の大いなる権威と主権とを素直に認めて、「あなたの御思い通りになして下さい」と告白する信仰に立たせられるなら、神から、「あなたが神を畏れる者であることを認める」との御声を頂くことができるでしょう。神を畏れる者を、神は、愛し導かずにはおれないお方なのですから。

小区分　　（１：39～56）
21 日　１：51～53　どんでん返しの人生

マリヤは、なお続けて歌っています。それは、救い主がおいでになると、どんでん返しがあるということを預言する歌となりました。すなわちその時には、高ぶる者は低くされ、権力者は権力を奪われ、卑しめられている人は高くされ、飢えている者は満たされ、富んでいる者は飢えさせられる、と言うのです。

マリヤはどうして、喜びからあふれた歌と共にこのような預言となる内容を歌ったのでしょうか。マリヤがハンナの歌を通して、メシヤ（これはヘブル語の表現で、新約聖書の時代ではギリシヤ語で書かれましたから、ギリシヤ語ではキリストと言います。救い主のことです。）が来られるとこのようになる、と感じ取ったのでしょうか。この当時の一般のメシヤ観は、イスラエルの民のためにメシヤがおいでになり、この当時イスラエルはローマの支配下にありましたから、ローマの支配から政治的に解放、独立を得させてくれ、再びこの地上に、神の国を打ち立ててくれる王としてきて下さると言うことを期待するものでありました。

しかし、マリヤが預言したものはそれとは異なり、メシヤがおいでになると、人間の価値観、基準、思想においてどんでん返しが起こるというものでありました。事実、イエス・キリストがおいでになり、このことが実現したのです。キリストがお語りになったことは、人間の考えていたことと、何と異なっていたことでしょうか。

その例を挙げればきりがありませんが、２，３の例を挙

げてみましょう。「悲しむ者は幸いだ」（マタイ５：4）と言われ、「偉くなりたい者は仕える者になれ」（マタイ 20：25～27）と言われ、「自分の命を救おうと思う者はそれを失い、私のために自分の命を失う者はそれを見出す」（マタイ 16：15）と言われました。又、キリストがおいでになったこと自体が、人間の願っていたことと全く異なっていたことが明かであります。

人間の考えていたメシヤは、きよい人で、当時の宗教指導者たちがしていたように、罪人や取税人たち、異邦人たち（宗教的に汚れていると見られていた人たち）と何ら交わられることなどしないと思っていました。それは、汚れた人と交わるとその人も宗教的に汚れると考えていたからです。しかしイエス様は、そのような汚れていると言われていた人々、すなわち、世から見捨てられていた人々と平気で交わり、その友となりました。

そのことを直接に非難した人たちがいたのですが、イエス様は、その人たちに対してこう言われました。「健康な人には医者はいらない、いるのは病人である。私が来たのは、義人を招くためではなく、罪人を招いて悔い改めさせるためである」（ルカ５：31,32）と。自分を健康で、汚れがないと思っている人よりも、私は霊的な医者として、汚れたもの、罪深い者を救うために来たのだと言われたのです。

これは何と言う明確などんでん返しでしょうか。これを聞いて驚かない者がいるでしょうか。神の御心の不思議を思わないでおれるでしょうか。この人生観についてのどんでん返しが起こることを、マリヤによってすでに歌われていたのです。マリヤに先のことを見ることができたわけではなく、その時に、聖霊なる神様が、その思いを彼女の内に起こされたので、自分ではよく分からないまま、預言し

たとしか言いようがありません。
　このことは、今日においても事実だと言えます。私たちは、イエス・キリストを信じることにより、この世の掲げている価値観、基準、思想からのどんでん返しの人生を見出すことができるのです。
　この世の求めるものと神のお考えとは 180 度異なっています。人は貧しいことを好まず、富みを欲します。しかし神は、あえて貧しい者を選ばれると言われているのです。裕福な者にしてあげるから、今は貧しいことを喜びなさいと言われているのではありません。富がいかに害毒にあふれているものであるかを知って、富むことを求めず、貧しくされていることを嘆かず、それをそのまま受け入れ、神が祝福を与えようとして選んで下さっていることを喜びなさいと言われているのです。
　また、自分は立派だ、素晴らしい人間だと思い上がる者を、神は最も忌み嫌われます。神よりも、自分を誇りとするからです。「神は高ぶる者を低くし、へりくだる者を高くされる」と他の箇所に記されていますが、これが神のお心の原則なのです。
　クリスチャンは、この世にあってどんでん返しの人生を積極的に選び取った者だと言っても過言ではありません。神が示して下さったどんでん返しの価値観、人生観を持って生きていこうとするので、人々はその生き方を不思議に思うのです。なぜそんな生き方を望み、そのような生き方をしようとするのだろうかと。
　クリスチャンは、このどんでん返しの生き方を求めることが神のお心に適い、平安な最高の人生を送ることができると信じるようになった人のことです。人生において、貧しいことや、悲しいと思うことは、起きてくることを避け

ることはできませんが、自分の生き方を恥ずかしいと思うことはないのです。この世が追い求めるものを求めなくなり、神が望まれる価値観を大事にして、それを喜びとし、誇りとして、どんでん返しの生き方をしていくことの方が、幸いな人生であることを味わったからです。たとえ、この世の基準から見て、あまり重要ではないと見られている立場にいたとしても、神はその人を愛し、救い出して、もっとも大事な子として導こうとして下さっているのです。

神を信じることによって、この世の価値観から解放されて、自由にされます。富や、権力や、博識や、名誉はなくても、一人の人間としてこの地上に生かされ、神を見上げることによって意味のある人間として見られ、神と共にある最高の人生を送ることができるのです。

この生き方の素晴らしさを味わった人は、もはや、この世の追い求めるものを追い求めず、この世が見捨てた隅のかしら石（キリストのことを比喩的に示した言葉で、人々は不要なものとして捨てるが、神はそれを用いられる）を慕い、追い求める者とされました。キリストは、どんなに卑しいと見られている者さえも、その魂を病から救い出し、喜びにあふれた人間に造り変えて下さるお方だからです。この世の価値観から排除されていた人も、魂が救い出されて、最高の人生を生きることができるようにされるのです。何というどんでん返しでしょうか。

小区分　　（１：39～56）
22 日　１：54，55　神の憐れみと真実

マリヤは救い主誕生の告知を、単なる自分に対する御告げという個人的なものとして受けとめていませんでした。長い間、イスラエルの先祖に約束されてきたことの成就として受けとめ、約束を守って実現して下さった主を心から讃美したのです。

神は、一度なされた約束を忘れられるお方ではありません。人間は不真実な心を持っている者でありますから、自分の都合によって、約束を忘れてしまったり、うやむやにしたりすることもありますが、神は決して忘れられません。というより、実現なさること以外は決して約束なさらないお方なのです。

人間は、忘却するという性質を持っています。これは利点でもあり欠点でもあります。悲しい出来事に出会い、その悲しみに耐えられないと思うほどのことであっても、時が経てば、その悲しみは薄れていき、もちろん人によって差はありますが、ほとんど消えていきます。もし人間に、忘却するという性質がなければ、人は余りにも多くの悲しみ、失望、虚しさを抱えて、耐えられなくなってしまうものですから、この意味で忘却は利点です。

けれども、この忘却は、大切な約束事についても、その力を発揮してしまうのが大きな欠点なのです。イスラエルの民は、エジプトを出て、シナイ山の麓にいた時に、神の言葉を告げたモーセを通して、「我々は主が言われたことを、皆行います」（出エジプト 19：8）と偉大なる神に畏れの

心を抱いて固く約束し、誓いました。
　それなのに、何とその口の根が乾かない内に、モーセが山から戻ってくるのが少し遅いからと言って、イスラエルの民はモーセの兄アロンに押し迫り、金の子牛を造らせて偶像礼拝をし、絶対に破ってはならない約束を、ことごとく破ってしまいました。その時の都合次第ではいとも簡単に約束を破ってしまう、約束をしたことに対する人間の不真実さは、ここまでひどいのかと思わされます。神を失望させる専門家ではないかと思わされるほどです。しかしこれは、イスラエルの例を見るまでもなく、私たち自身の不真実さを考えてみても、すぐ理解できることです。
　このような不真実な人間に対しても、神は忍耐し、恵みの約束をして下さっているのです。なんとありがたいことでしょうか。もし神が、こんな不真実な人間に忍耐するのはばからしいと思われて、人間を見捨てられたとしたなら、人間には、もはや救いの希望が全く絶たれていたことになります。しかし、神はそうはされませんでした。メシヤを遣わすとの大いなる約束をして下さったのです。
　そして神は、このような約束をした上で、真実なお心を持って、それに答えて下さったのです。アブラハムとその子孫とに対してなされた約束を、今マリヤの上に臨んで確かに成就して下さったのです。人間の不真実さに比べて、神の真実は何と誠実で、愛に満ちたものでしょうか。
　マリヤが思わず歌ってしまったこのことが、人々にもたらされた最大の福音となったのです。全世界の人々に、そればかりか、過去、現在、未来の全人類に亘るすべての人にもたらされた最大の福音となる内容であることを、マリヤ自身も、そこまでは気が付いていなかったことでしょう。
　神が、イスラエルの先祖に対して語られた約束、すなわ

ち、救い主の誕生を、自分を用いて成就されることが、すべての人間にとって、真の人間性を回復するための大革命となる事柄であり、人間を根底から変えるものとなることを、歌ったのです。

マリヤは、そこまでの神の深い御心を、どこまで悟っていたかはよく分かりません。しかし、神はその大いなることを、ここに成就しようとしておられるのです。それは、ただご自身の真実なるご性質の故に実現しようとされたのです。何という憐れみでしょうか。

この約束が成就されることによって、愛し、導く価値の全くない罪人である私たちを、その恐ろしい罪から救い出し、罪から解放された自由人として下さるようになったのです。神が、真実なご性質を持っておられたからこそ、こんな罪深い私たちが、罪から救われ、神の子としての身分を頂いて生かされている今の私があると言えます。このことの持つ深い神のお心が分かったら、マリヤと共に、神の真実の素晴らしさをほめ歌わずにはおれないのです。

小区分　　（１：39～56）
23 日　１：56　主にある交わり

こうして、御霊に満たされたマリヤとエリサベツとが、３か月の間、神を讃美する集会を持つことができたとは、何と素晴らしいことでしょう。この光景を思い浮かべると、何とも麗しい光景ではないでしょうか。

イエス様がある時言われました。「ふたりまたは３人が、わたしの名によって集まっている所には、わたしもその中にいるのである。」（マタイ 18：20）と。イエス様は、わたしの名によって集まっている集まりであるかないかを見分けられると言われているのです。それ以外の条件は一切付けられてはいません。いや、付けてはいけないのです。わたしの名だけによって集まり、わたしを喜び、わたしに祈り、わたしを称える所には、わたしはそこに臨在する（今では見えないお方でありますが、そばにいて下さる）と言っておられるのです。

マリヤとエリサベツは、主（神やイエス・キリストを指し、神なる存在に対して使います）を中心として、主の臨在を覚えつつ、その交わりの時を過ごしたことと思われます。楽しい想像が許されるならば、その交わりは、マリヤとエリサベツだけではなく、胎児イエスと胎児ヨハネとがそこに加わっており、更に神がそこに伴って下さっているので、目には見えなくても、楽しい賑やかな交わりだったのではないでしょうか。

私たちは、主にある交わりをすると言いながら、キリスト不在の交わりをすることがあります。このようなうわべ

だけの交わり、形だけの交わりを見させられるのは残念なことです。このような交わりに、神が力を注がれることはなく、信仰と喜びと力を見ることはできません。もちろんこの喜びと力とは、神によるものですから、神が中心におられない、無意味な交わりにしてはならないのです。

真の交わりとは、使徒ヨハネが手紙で言っているように、「わたしたちの交わりとは、父ならびに御子イエス・キリストとの交わりのことである」（Ⅰヨハネ１：３）という霊的な内容のことであり、これ以外のことは、聖書では交わりとは言わないのです。一般で言う交際とか交流とは違います。ましておしゃべりの事ではありません。

マリヤとエリサベツは、年齢の壁を越えて、食事の支度をしながら、洗濯をしながら、水を汲みながら、ザカリヤの世話をしながら、互いの信仰を高め合い、励まし合い、讃美し合ったことでしょう。そこには、形にこだわらない霊的な自由な交わりを見ることができます。

喜びに満ちたその交わりを、ザカリヤは側で見ていながら、自らは言葉を出して共に交わることができないもどかしさを感じていたことでしょう。なぜなら、自らの不信の罰として、神によっておしにされていたからです。それはザカリヤにとって、何と長く感じた３か月間だったことでしょうか。

しかし、神のなされることの不思議、人知では到底測り知ることのできないその偉大さを、目の当たりに見させられた３か月間でもあったに違いありません。又それが、ザカリヤにとっても、言葉を出すことはできなかったのですが、神によって豊かに取り扱われていた大事な時であったと言うことができます。

マリヤは、御告げを受けた時のあの喜びが、普通なら少

しずつ薄れていくと思うのですが、薄れるどころか、かえって増し加わっていき、これから先どんなことがあろうとも、神にすべてをお任せしようとの信仰が強くされていき、３か月前にきた道を、足取りも軽く、帰って行ったと思われるのです。

小区分　（１：57～66）　ヨハネの誕生
24 日　１：57，58　神のまなざし

エリサベツは、月が満ちてヨハネを産みました。親族や近所の人々は、それを見て、何と驚くべきことだと言い、主が大いなるあわれみをかけられたのだと言って喜んだと、ごく簡単に書き記されています。しかし、このような周りの人々の反応を、ザカリヤとエリサベツはどのような思いで見ていたのでしょうか。

人々はこれまで、エリサベツに対して、言葉にまでは出さなかったでしょうが、心の中では、神に呪われて不妊にされている女という目で見続けていたと思われます。これが、当時の人々の信仰的見方であったからです。

そんな人々が、老齢となっていたエリサベツが、何と男の子を生んだということで、驚きつつ、共々に喜んだというのです。何と人間の判断はいい加減で、又冷たく、変わりやすいものでしょうか。得てして人間の判断は、表面だけしか見ることができず、神の御心を曲げて受けとめやすく、人を平気で傷つけてしまうものだと思わされます。

親族や近所の人々は、エリサベツとザカリヤが、今までどのような思いで屈辱に耐えてきたかという事など全く考えもせず、人の心に対する配慮を持つことをせず、目先の結果だけで判断して、すぐに他の人を裁いてしまうのです。これが思慮の浅い人の現実です。

この目が人を見下げ、人をうらやみ、人のものを欲して満足することを知らないでいる目なのです。この目は罪を犯すことに早く、あわれみを持つことにはうとい。また、

人を見下げることに早く、人を敬い尊重することにはうとい。これこそ目を塞ぎたくなる現実だと言えます。神だけが、屈辱を受けてきた私たちの心を思いやって下さるお方だと彼らは思っていたのではないでしょうか。

ザカリヤとエリサベツは、このような経験を通して、人間の目の怖さを教えられ、人々からの祝福を退けようとはしなかったでしょうが、人々からの思いやりやそのまなざしを期待しようという心は失われていたでしょう。

このような人間のまなざしとは異なり、神が私たちに向けて下さるまなざしは、愛と憐れみとに満ちたものであります。それを知るためには、神が遣わして下さった神の御一人子イエス様が、人々にどのようなまなざしを向けられたかを見ればよく分かります。このお方の、人の弱さを思いやる同情のまなざしは、ナインのやもめに向けられたまなざしによく現れていることが、この福音書の７章に記されています。（7：11～17）

又、３度主を知らないと誓って、主を裏切った後の、ペテロに対して向けられたイエス様のまなざしは、愚かな姿を現したペテロを責める目ではなく、愛と慰めに満ちていた目であったのを見て、ペテロは、かえって強い迫り覚え、何とも惨めな自分の姿が思われて激しく泣いたのです。（ルカ 22：61、62）

イエス様のまなざしは、父なる神のまなざしだとも言えます。神が私たち一人一人に注いで下さっているまなざしは、私たちの弱さも、無力さも、惨めさもすべて知り尽くした上で注いで下さっている憐れみのまなざしなのです。

人は、私たちのそのような内面を知らず、外面だけで判断して、冷たい目、審きの目、見下す目で見ようとします。それがどんなに人の心を傷付けるか考えようともしません。

いや、自分自身ですら、自分に対して無知で、本当の意味で、自分を愛し、憐れみの目で自分を見ることが出来ないのが現状なのです。信仰者は、神の憐れみのまなざしが見えるようになると、人の目に左右されず、自分を本気で愛することができるようになるのです。

神のまなざしは、人の目とは異なっています。神は私たちの内面をすべてご存知の上で、イエス様がナインのやもめに深い慰めに満ちた同情を寄せられたように、私たち一人一人に対して深い同情のまなざしを持って、私たちの弱さ、惨めさを思いやって下さっているのです。

もはや、ザカリヤとエリサベツは、人間からの思いやりのまなざしを期待しなくなりました。期待すれば、必ず失望するからです。彼らは、神の情け深いまなざしのみを見ようとしたのです。そして、そこに本当の慰めを得たのです。人にではなく、神に目を向ける。これが信仰なのです。

私たちも、神の深いまなざしを見る（肉の目で見ることはできませんが、神の深いお心を思う時、霊で見ることができます）信仰を持ち、そこに本当の慰めを得ていく者でありたいと思うのです。そして私たち自身が、人の外面のみを見て、冷たい目、見下げる目、憐れみのない目で人を見ることを止め、少しでも思いやりのまなざしを持って、人を見ていく者に変えられたいと思うのです。神の深いまなざしを見ている者はそのように変えられていくのです。なぜなら、神がそのように変えて行って下さるからです。

小区分　　（１：57～66）
25 日　１：59～64　信仰の回復

ヨハネが生まれてから８日目になった時、聖書に記され、律法に定められてある通り、割礼（男の子の生殖器包皮を切開するという宗教的儀式のことで、選民のしるしとして行われ、それによって神の民として認められた）を施す日になったので、人々がやって来て、幼な子に割礼を施こそうとしました。その時には、当時の習慣に従って、親にまず、幼な子に命名するように促します。

当時の命名は、父の名か、祖父がいれば祖父の名をつける習慣となっており、それからあまりかけ離れた名をつけることはしませんでした。しかし、エリサベツはその習慣に従わず、まったく親族につながりのない名前として、その子の名はヨハネと言ったので、それを聞いた人々は、そんな名前でいいのかと戸惑ってしまいました。

そこでザカリヤの意見を聞こうとして、口はきけなくても耳は聞こえたので、あなたはどういう名をつけたいと思っているのかと尋ねた。するとザカリヤは書き板にその子の名前をヨハネと書いたのです。

この書き板というのは、木の板にロウを流したものであったと言われています。ペンは骨の尖ったもの、あるいは金属片の尖ったペン先で、もう一方はへらのようになっていて、字を消すようにできていました。

ザカリヤは、みんなが注目している前で、スラスラと何の迷いもなく、その名はヨハネと書き記したのです。人々はそこで２度びっくりです。しかもその時に、何と 10 ヶ

月間も口が聞けなくなっていたザカリヤが、急に口が開いて喋り出したのです。その異様な出来事に人々はおののいてしまいました。

近所の人々や親族の人々は、ザカリヤがどんな理由でおしになったのかを、その様子を聞いて知っていたと思われます。それは、神殿において、聖所の中で香をたくという、重要な務めをしていた時に、幻を見て喋れなくなったのだということを。そのザカリヤが、その名はヨハネと書いたとたん、閉ざされていた口が開いたのですから、そこに偉大な神の御手が働いたと、誰しも感じずにはおれなかったのではないでしょうか。

人々の思いはどうであれ、ザカリヤとエリサベツの感激は、ヨハネの誕生に加えて、不信の結果与えられたザカリヤへの罰に対する神の赦しがここに示され、ますます大きなものになったのです。

ここで、神のなされたことを考えてみましょう。それは、ザカリヤの口が聞かれたのは、ヨハネが生まれた時ではなく、「その名はヨハネ」と書き板に書いた時であったことです。これは一体何を意味しているのでしょうか。

ザカリヤが一時的におしにされたのは、「時が来れば成就する神の言葉を信じなかった」からでありました。時が来れば成就するという事の中には、ヨハネが、老夫婦から奇蹟的な誕生をするということと、メシヤの先駆者としての使命を果たすということの２つの内容が含まれています。

ザカリヤが不信を現わしたのは、奇蹟的な誕生についてだけではなく、私たちのような老夫婦から、まさかメシヤの先駆者が生まれるとは思えない、との不信もあったのでしょう。

それ故に、ザカリヤが「その名はヨハネ」と書き記した

時、「その子はヨハネだ、神がメシヤの先駆者として立てられたヨハネに間違いありません」という告白となったのです。ザカリヤの信仰の回復をここに見られた神は、彼が、この 10 ヶ月間、自分に与えられた罰を正しく受けとめ、「時が来れば成就するわたしの言葉」を信頼するに至ったと認められたので、彼の口を聞かれたのです。このように信仰が回復したザカリヤに対して、もはや罰を与え続ける必要性がなくなったのです。

　このような神の赦しを体験したザカリヤの口から、今までととどめられていた思いが、せきを切ったかのように、神への賛美が溢れ出てきたのです。与えられた神の罰を、正しく受けとめて信仰の糧としたザカリヤにとって、ヘブル書 12:7～11 に記されている所の神の訓練、すなわち、神はこの私をご自身の大事な子として取り扱って、懲らしめて下さった、ということを学び取る貴重な体験の時とさせて頂いたのです。

　私たちの信仰も、訓練されることなしに高められていくことはありません。時には、それは厳しく感じる時もあるかもしれませんが、その懲らしめも、私の信仰を回復させるために、私を大事な子と受けとめて下さっているが故に、育てようとして与えられたものなのだと思うと、決してその経験を無駄にしてはいけないと思わされます。神が与えられる罰は、罪の結果受けさせられる刑罰なのではなく、信仰を育てるための罰であったことがこの記事からよく分かります。神は私たちを大事なことして育てようとしてくださっていることが分かります。

小区分　　（１：57～66）
26 日　１：65，66　主の御手

生後８日目に、幼な子ヨハネに割礼を施すことが定まっていた時、そこにみんなが集まってきていたのです。長い間、罰を受けておしにされていたザカリヤが、みんなのいる目の前において、目に見えない神の御手が働いて、突然口が開かれて語り出したという驚くべき光景を目の当たりした人々は、驚いただけではなく、神が、ザカリヤの信仰を見て罰を解かれたと感じ、偉大なる神への畏れに満たされたのです。

もはや子供が生まれる可能性などあり得ない老齢のエリサベツの上に起こされた、奇蹟としか言えない超高齢出産という出来事だけでも、驚愕の事実として感じさせられ、この生まれてきた子は、一体どんな人物になるのだろうかと思わされていたのに、その上、ザカリヤの上になされた、人知を超えた神の働き掛けを見させられ、それらを合わせて考えてみますと、この幼な子が神の大きな御手の中にあって用いられる、偉大な人物になると思わない人はいませんでした。

この話がビッグニュースとして近隣の至る所で話題となったのもうなずけることです。ルカはこれらのことを一言で、「主の御手が彼（ヨハネ）と共にあった。」と書き記しています。非常に簡単な表現ではありますが、この言葉に含まれている意味は深く、これらの記事を理解する大切な鍵となる言葉だと言えます。

「主の御手」とは「神の守り導く偉大な力」を現す擬人

法で語られている比喩的表現であります。ヨハネが生まれる前から、もちろん生まれてからも、彼の上に主の御力が働き、彼を守り養い、主がご計画なさっている通りに導くために、その導きを休まれることがないという、その様子が、この一言で言い表されています。

主が、預言者エレミヤに語られた御言葉に、「イスラエルの家よ、この陶器師がしたように、わたしもあなたにできないのだろうか。イスラエルの家よ、陶器師の手に粘土があるように、あなたがたは私の手のうちにある」（エレミヤ18：6）という御言葉があります。

これは陶器師が、自分の意のままに器を作ることができるように、神が、ご自身の御心のままにイスラエルの民をどのようにでも造ることの出来る能力を持っておられることが宣言されているのです。

このことは、今日において、神に選ばれた霊的イスラエル（神が選ばれた神の民のことで、今日においては、キリスト教会の中に加えられた信仰者の集まりのことを指しています）である私たち信仰者にも、同じように語っておられるということが分かります。すべての信仰者は、神の御手の中に生かされており、粘土が陶器師の手の中にあるように、神を信じる者は、神の御心のままに導かれているのです。私たちの思いのままにではなく、神の御心のままにですから、ある時はやさしく感じられるようなことがあるでしょうが、それだけではなく、時には厳しく、辛く感じるようなことも当然あるのです。

主の御手に導かれたヨハネは、大きくなってから、神が与えて下さった使命を果たすために、荒野で厳しい訓練を受け、時が満ちた時、ヨルダン川のほとりへ行って、「悔い改めよ」との第１声を発しました。このように使命の第一

歩を踏み出すことが出来たのも、主の恵み深い御手が、ヨハネの上に休みなく働いていたからだと言えます。

このような恵み深い御手によって導きを受けているのは、ヨハネだけではありません。私たちが感じているか感じていないかにかかわらず、人を真に生かすために、主の御手がいつも私たちの上に働いているのです。それ故、私たちのような者が神を信じる器に造り変えられ、主を喜び、主によって守り養われていることに、感謝を覚えることが出来るようにされているのです。これは何と素晴らしい事実でしょうか。

私たちが今、主の御手の中に置かれ、主の御手が共にあることを喜び、主の御手に支えられているということを知ることができる人は、何と力強いことでしょうか。神は一人一人を守り養うために、偉大な御手でもって働き続けて下さり、そのお働きを決して借しまれることはないのです。

神は、ご自身の御心に適った最も良い作品が出来上がるまで、その御手を休まれません。しかも、主の御手は、イザヤ 41：10 に記されていますように「勝利の右の手」（悪に勝つ偉大な力を持つ存在）ですから、この御手によって支えられているということは、私たちの人生は、あらゆる点で間違いなく、霊的勝利（現実の歩みにおいて、いろいろな問題のない、戦いのない平穏な人生にされるわけではないが、そこにいつも、神が共にいて下さり、支えて下さり、守りと祝福とを与えて下さっていると確信することができるので、霊は平安と喜びに満たされておることができる勝利感のこと）へと導かれていると信じることが出来るのですから、こんな嬉しいことはありません。たとえ、見た目が勝利の人生に見えなくとも（この地上の歩みにおいて、裕福で、何の心配もなく、問題も起こらない人生を歩

むことができるとは限らなくても)、主の御手が、私たちの上に働いているという事実によって、間違いなく勝利の人生へと導かれていると信じることができるのです。

小区分　（１：67～80）ザカリヤの預言
27 日　１：67～71　霊的自由独立の信仰

64 節に、ザカリヤは口が聞かれたとたん、神をほめたたえたとあります。ほめたたえるだけではなく、預言までするのです。（預言とは、先のことを予測して語る予言とは違い、過去、現在、未来をも含めた、神が示された内容を人々に伝えることです）その内容が 68 節～79 節であります。ザカリヤが聖霊に満たされて預言をしたのは、神がこの時代の人々に、ザカリヤの口を通して明かにしようとしておられることを人々に示されるためでありました。

人類に対して、福音の夜明けが啓示されたことを、ザカリヤの預言として、ルカは書き留めたのです。マリヤの讃歌よりも、もう一歩進んでその福音の輪郭が明かにされています。ルカはそれを書き留めながら、神の啓示（神の御心が明確に示されること）の完璧さに心踊ったのではないでしょうか。

この内容を大きく２つに分けることができます。第１部が 68～75 節、神がメシヤを遣わし、人々に救いの手を差し伸べられることが示され。第２部は 76～79 節、先駆者ヨハネの使命とその働きの結果について述べています。

今日の箇所は、第１部の前半であります。ザカリヤは、親族の一人である年若いマリヤが主の母として選ばれ、すでに身ごもっているということを、おしにされていた時、マリヤの言葉を聞いてそれを信じていたのです。まだその兆候は外からは見えないけれども、メシヤはすでに神から遣わされたのだと、この時にはすでに確信していました。

ですから彼は、預言されてきたように、メシヤはダビデの子孫から出ること。この力強い救い主によって、イスラエルの民が敵から救われることを歌うのです。この点においてザカリヤは、まだ旧約信仰の域を脱してはいませんでした。旧約信仰というよりも、むしろユダヤ教信仰というべきかもしれません。

ユダヤ教信仰においては、ダビデの子孫としてこられるメシヤは、あくまでもイスラエルの民を救い出して下さるお方。すなわち、この当時は、神を神とも思わない異教国の属国にされていたのです。（当時は巨大なローマ帝国の属国にされていた）そのような現在の屈辱的な状態から自由にし、独立させて下さり、神が支配して下さる国とされるために、神はメシヤを遣わして下さると信じていたのです。言わば、ザカリヤは、当時の不完全なメシヤ観をもって預言をしたのでありますが、期せずして、そこには彼の思い以上の深い霊的真理を語らせようとして、聖霊なる神が働いておられたのです。

ルカが、このザカリヤの讃歌をここに書き記したのは、そこに聖霊が語らせておられる深い霊的真理を見出したからでありました。それは、霊的な意味で、神の民イスラエルとして神に選ばれ、救い出された私たちに、霊的な自由独立を与えるためにメシヤが来て下さったという真理でありました。

すなわち、私たちのもっとも憎むべき敵であるサタンと（サタンとは、目に見えない霊的な恐ろしい存在であり、神に敵対して、人々を神から引き離そうとしてくる悪しき存在のこと）、サタンが最大の武器として用いる罪と死とに縛られていた私たちを、そこから救い出して解放するためにメシヤが来て下さる、という福音の真理でありました。

それ故、このことを記したのは、イエス・キリストがもたらして下さった霊的自由と独立とを味わい、サタンと、サタンの武器である罪と死とから解放された喜びに満たされている、著者ルカ自身の証しだとも言うことができます。

私たちも、そこに、私たちにとっての福音を見出すことができます。ルカが証ししたように、この私のために、イエス・キリストがもたらして下さった罪と死とからの霊的自由と独立とを自分のものとして味わい、喜びに満たされる者にして頂いたという福音の恵みです。私たちは、この恵みの大きさがどれだけ分かっているでしょうか。

キリストによって与えられた霊的自由を、今も得ているでしょうか。今もなお何かに縛られている所がないでしょうか。その何かとは、第１はこの世の事柄でしょう。目の前に起こるいろいろな事柄に振り回されやすいのが人間です。お金、世間体、人の目などに縛られて、自由を失っている人も多いのです。キリストはこれらの事柄からも解放させ、自由を与えて下さるお方なのです。

この世の事柄ばかりとは限りません。信仰を持って自由を与えられたのに、人の目に、信仰者らしく見せかけることばかりに思いを奪われるような愚かさに縛られて、せっかく与えられた自由を失い、喜びをなくしてしまう、形だけの信仰者もいるのです。

又、キリストにより霊的な独立を得ているでしょうか。キリスト以外に、なにものにも頼らずにおれるでしょうか。人にも、物にも、あるいは自分自身にも。ただキリストの中に立っているだけで、他にすがるものがなくても安心しておれるでしょうか。よく考えてみる必要があります。

キリストがおいでになったのは、ご自身のあがないによって、私たちに霊的自由を得させ、キリストにだけより頼

むという霊的独立を得させるためでありました。私たちは、ザカリヤの讃歌を用いてこの福音の素晴らしさを示し、自ら霊的な自由独立の信仰に立っていた著者ルカの確かな信仰に学ぶ必要があると思わされるのです。

小区分　　（１：67～80）
28 日　１：72～75　救いの目的

神がメシヤ（キリスト）を遣わして下さることにより、イスラエルの民が、異邦人の手から救われ、自由独立を得ることができるようになることをザカリヤは預言し、これが単なる一時の神の思い付きによるものではなく、古くから、すなわち、先祖アブラハムとの間に、立てられた契約（約束）が土台になっているのだと示し、一度立てられた約束は、必ず実現されるという神の真実な、かつ遠大なご計画に目を向けさせています。

これは、マリヤの讃歌にも通じることであると共に（1：54，55）、旧約の重要な信仰でありました。そしてザカリヤは、イスラエルの民を敵の手から救い出されるのは、イスラエルの民が生涯きよく正しく、神の御前にあって不安なく仕えるようになるためであることを歌っています。

これは、前半の箇所と同様、ザカリヤは旧約信仰の域を出ていないので、イスラエルの民の救いとその目的とを預言している訳ですが、期せずして、神の民として選び出される霊的イスラエルの、霊的自由独立とその目的とを、神が語らせておられると、ルカは読み取っているのです。

すなわち、ルカの目から見て、霊的イスラエルであるクリスチャン（民族を超えたイエス・キリストを信じる全世界の民）が、敵であるサタンの手から救い出され、生涯きよく正しく御前に恐れなく仕えさせて頂けるようにされていく。これが先祖アブラハムに立てられた誓いの成就であって、私たちを救い出して下さった目的なのだと言って

いるのです。
　きよく正しく生きるとはどういうことでしょうか。この世的な観点から言うならば、欠点のない、汚れた所のない聖人のように、又、偽らず、罪を犯さない義人のように、生きるということになります。しかし信仰者にとって、きよく正しく生きるということは、そのようなことを指しているではありません。一つ一つの言葉を分けて考えてみることにしましょう。
　きよく生きるとは、人間が自分の能力と努力で獲得できるものではないのです。どれだけ頑張ってもきよくなることなどできないのです。神の目に適うきよさを、人間はだれも持ってはいません。神から与えられずして有り得ないことなのです。神の目から見たら、とてもきよくなれるような人間ではないのです。そんな汚れた人間のために、神はキリストを遣わして下さり、信じるだけでその人をきよくするために、神は、キリストを十字架にかけ、尊い血を流させて下さったのです。
　すなわち、キリストの血によってきよくされると信じて、始めて人はきよくされた者として生きることが出来るのです。ですから、このきよさとは、道徳的な意味でのきよさのことではなく、神の目から見てきよいと写るようになったという霊的事実を指していることを忘れてはなりません。又、これが神の御前にあって生きる者のもっとも大切な点なのです。
　また、正しく生きたいと思っても、聖書は、人間が罪深い存在であることを指摘し、「義人はいない、一人もいない」（ローマ３：10）とはっきりと言われています。人はどんなに精進を積んでも、本質が汚れているから、正しくあることはできないと断言するのです。

人間には、自分の力で罪から逃れることができないことを示した上で、神は、そんな私たち人間に、義とされる道を用意して下さったのです。ほふられた小羊のあがないを信じるだけで、神の目に義と写るようにして下さったと言うのです。すなわち聖書でいう正しさとは、神が義と見て下さるという正しさのことなのです。

このように、きよさも正しさも、どちらもキリストを通して与えられずしては持ち得ないもの、キリストを信じるだけで始めて、この私たちの上に与えられるものなのです。そのことを思えば、クリスチャンにとってきよく正しく生きるとは、キリストのなして下さったあがないのみわざを拠り所として、その事実を信じることによって、神の御前に生かされていることを喜びつつ生きることなのです。

そして、神の御前に生きる者の第１になすことは、神に仕えることです。仕えるとは、言うまでもなく礼拝するということです。神を称え、神の御心を第１とし、神の御言葉に従うこと。これが神に仕えている姿です。神の御心を第１として歩むことなくして、いくら教会の奉仕をし、献金をし、慈善をし、善行を積んだとしても、それは単なる教会ごっこであって、神に仕えているのではありません。

霊的自由独立を得た者は、キリストのあがないのみわざの故に、神の御前に生かされていることを喜びつつ生き、見えない霊なる主をたたえ、主の御心を第１とし、主の御言葉に従って生きるようにと導かれています。これがクリスチャンに与えられた光栄なのです。

こうしてクリスチャンは、すべて神の側によって整えて下さった恵みの中に生きる者とされ、従う者とされています。ただキリストの故に、私たちがきよく、正しく、恐れなく主に仕えることができる者とされているとは、本当に

感謝という他ありません。
　たとえ、人からきよくなっていると見られず、正しくなっていると見られず、主に仕えているように見られなくても、神を第１として従う私たちを見て、神は、きよい者、義しい者と認めて下さり、その事実を喜んで、主をたたえることが出来るようにして下さっているのですから、ただただ感謝であります。又、それが私たちの生きる拠り所となっているのです。
　しかし、神を第１として従うことをしないなら、私たちは、きよさも正しさもない、人間としては何の価値もない空しい存在でしかないのです。

小区分　　（１：67～80）
29 日　１：76，77　福音の道備え

ザカリヤは、神がメシヤを遣わして下さることにより、イスラエルの救いが成就することに思いをめぐらせ、そのメシヤの先駆者として、これから生まれる我が子ヨハネが道備えをし、人々に罪の赦しを頂く救いについて知らせる者となることを、ここで歌っています。

ザカリヤは、10 ヶ月前に、自分に語られた御使いの言葉を決して忘れることはありませんでした。「イスラエルの多くの子らを、主なる彼らの神に立ち帰らせるであろう。彼はエリヤの霊と力とを持って、御前に先立って行き、父の心を子に向けさせ、逆らう者に義人の思いを持たせて、整えられた民を主に備えるであろう」。

このように語られた御言葉をずっと心の中で思い浮かべ、言葉に出すことができなかったから、一人で心の中において瞑想してきたザカリヤでした。その彼が、閉ざされていた口が瞬時に開かれ、霊の導きを頂いて告白した言葉が、人々に対しては預言となって宣言されたのです。

もはやザカリヤにとって、我が子ヨハネがエリヤの再来（紀元前９世紀前半にイスラエルで活躍した預言者中の預言者と言える人で、このエリヤのような預言者が再来し、救い主の道備えとして現れると預言されていました）であることに、僅かの疑いも持っていませんでした。このような確かな信仰に立つ者に大きく変えられたザカリヤを、このように取り扱って下さった神の憐れみの大きさが思われます。厳しい罰を与えるという方法でしたが、ザカリヤに

とってふさわしいやり方で取り扱って下さった神様のことを思いますと、今日の私たちに対しても、憐れみによって取り扱って下さっていることを確信できるのです。

神は、キリストをお遣わしになる前に、道備えとしてのエリヤの再来を遣わそうとご計画されました。あたかも王の行く先々で、王の来られることを知らせ、人々に王を迎える準備をするように告げる先駆者のように、ヨハネを遣わされると言うのです。

けれどもどうして、救いに道備えが必要とされたのでしょうか。このことを考えてみる必要があります。神が、神のお考えでお決めになったことだ言えばそれまでですが、ここにも私たちが知らなければならない、神の御心が示されていると思えるのです。

当時の人々が思っていたような、ローマから政治的に解放してくれるメシヤとして来られるというならば、何の道備えをする必要があるでしょうか。人々は、政治的な解放を待ち望み、外側の解決のみに目が向けられていて、内面の霊的な事柄の方は全く忘れ去っていました。だからこそ道備えが必要であったのです。

まず、人々の目を内側に向けさせなければなりませんでした。神が、メシヤを遣わして取り扱って下さるのは、人の罪の問題でありました。神の遣わして下さるメシヤを、罪からの解放を与えて下さる霊的解放者として迎えるために、まず心備えをするようにと先駆者が遣わされ、人々の思いをそこに向けさせ、整えられる必要があったのです。これは神の思いやりでありました。

人の目を、まず霊的な事柄に向けさせる、これは今日の日本においては至難のわざであります。人々はこの世のことに捉われ、霊的な事柄があることさえ気付かずに生きて

おり、天地万物の創造者である神を知らず、自分の魂が、神の前にどのような状態なのか考えることもありません。このような人々に、罪からの救いの福音を知らせたところで、自分には無関係な事柄だとしか写らないのです。

福音を知らせる前に、まず人々に、神のおられること。人間は神に向かって生きていくべき存在であること。自分が神の前に罪深い罪人であること等を、認識させなければなりません。その上で、始めて罪の赦しの福音があることを伝えることが出来るのです。不思議な筋道ではありますが、人々があまりにも外側のことにしか目を向けておらず、霊的な事柄から遠く離れてしまっており、まず先駆者の務めとして、神と罪の事を教え示す必要があるのです。

ローマ５：20 で「罪の増し加わったところには、恵みもますます満ちあふれた」とパウロは語っていますが、それは、このことについて語っているのです。私たちの思いは神から離れており、罪の意識をほとんど持ってはいないのです。それ故、自分の内にある罪の実態を知れば知るほど、自分の惨めさを知れば知るほど、そのような罪を赦そうとされる神の恵みが増し加わっていくというのです。何と不思議な、罪人に対する恵みの福音でしょうか。これが聖書の示す真理なのです。

それ故、私たちは、聖書が示している自分の内にある罪（自分を造ってくださった神を無視して生きてきたことが最大の罪だと言われている）を知ることを拒んではなりません。拒むことは、神を偽り者とするのです（ヨハネ第１の手紙１：10）。罪を知ることは苦しいですが、恥ずかしいことではありません。それは恵みにつながっているのだとパウロは叫ぶのです。罪を認識しようとしない者、隠そうとする者は、自分から神の恵みを押し出してしまってい

るのです。
　先駆者ヨハネが来た後にキリストがお出でになる。それは霊的な内容で言うならば、罪の認識の後に福音の恵みが来るのです。それ故、神はヨハネを遣わして、まず人々に罪の認識を正しく持たせようとして、キリストの前に遣わされたのです。この神様の深いお心を悟って、私たちが自分の罪深さを見つめ、それが明かにされるならば、始めて、神の恵みがその後に用意されているのを知って、本当に喜ぶことができるのです。

小区分　　（１：67～80）
30 日　１：78，79　神を喜ぶ

キリストがこられる前に、先駆者がまず遣わされて、民に罪を認識させ、その上で、罪の赦しを頂くことができる救いがもたらされることを知らせます。このことは、神の深いあわれみのご計画によるものでした。

このあわれみの第１ステップがあってから後、すべての人を照らし導く神よりの光が、民に訪れると預言しています。それをヨハネ福音書１：９では「すべての人を照らすまことの光があって、世にきた」と表現しています。キリストがおいでになることによって、夜の闇が覆っているこの世界にさん然と輝き出して、すべてのものを照らし出す朝の光にたとえられているのです。

光は２つの働きをします。その第１は、暗黒と死の陰とに住む（座っている）者を照らし出します。暗黒の世界（神に目を向けない人間の世界）がどれだけ悲惨に満ちたものか、そしてその行き着くところが惨めな滅び（聖書が言う滅びとは、人間としての存在価値がないことが明らかにされ、生まれてきたことが無意味であることを示した上で、生きていなかった者のように消滅させられることを意味します）でしかないということ明かにします。又、サタンに支配され、死の陰におびやかされて生きることがどんなに惨めなものであるかを明かにするのです。

ここで「住む」と表現されている言葉は「座っている者」という意味を持っていますが、これは、このような悲惨と惨めさの中に、どっぶりと漬かり込んでいて、立ち上がろ

うとしない状態を示していることが分かります。
　たとえば、部屋の中に一筋の光が差し込むと、それまで目に見えなかった小さな無数のホコリが、部屋中に充満していることが分かって驚かされるように、真実の光（神）を知らないで、神なく、望みなく生きていて、生かされている意味さえも悟らず、ただ、この世のことにのみに心を奪われ、互いに争い、憎み合い、自分の事しか考えず、冷たく、暗く、愛のない世界に住み慣れてしまっている人々に対して、上からの光が照らし出され、今の生き方がどんなに惨めなものであり、神を無視して生きてきた愚かさがどんなものであるかを明かにされ、人々に生きるとはどういうことか、目を覚まさせることになるのです。
　第２に、光は、人々を単に目覚めさせるだけにとどまらず、人が暗黒と死の陰とに座り込んでいる事実を悟らせた後に、人としての歩むべき本当の道、神が人を導いておられる平和の道へと道先案内してくれるものとなります。「…たといわたしが暗やみの中にすわるとも、主はわが光となられる。…主はわたしを光に導き出してくださる。わたしは主の正義を見るであろう。」（旧約聖書ミカ７：８，９）と語られています。
　ここで言う平和とは、神と人との調和のとれた関係がまず回復され、人と人との調和のとれた関係が回復されることなのです。暗黒の世界では、人は平和を求めつつ争い、隣人と手を取り合っていきたいと願いつつ、隣人を蹴落とし、自己利益のみを追及しています。そんな人間に、平和とはまず、神と人との調和のとれた関係なくして有り得ないものであることを光は示すのです。
　光は、暗黒と死の陰とに座っている悲惨な状態を照らし出され、その惨めな姿を垣間見させられ、そのようになっ

てしまっている原因が、神との調和のとれた関係が崩れているからであることに気付いていないから、虚しい生き方しかもたらさず、悲惨な結果を甘んじて受けなければならないことを明かにされるのです。

そのことに気付き、神との平和を願い始めた人々のために、光としてこられたキリストは、この私を信じなさい、そうすれば罪赦された者として、神との交わりが回復され、神との調和を得た関係の中に生きることができると示されるのです。

キリストが、神との平和の道を開いて下さったのは、パウロがローマ人への手紙で述べているように、それは、私たちが神を喜ぶ者となるためでありました。「私たちは、今や和解を得させて下さった私たちの主イエス・キリストによって、神を喜ぶのである。」（ローマ５：11）

キリストのあがないのみわざ（私たちの罪を赦すために、身代わりとなって十字架上で死んでくださったこと）によって与えられた幸いは、神の敵であったこの私たちが、今や、神を喜ぶ者に造り変えられたと言うことなのです。何と素晴らしいことでしょうか。

このような驚くべき人間大変革が、罪人であったこの私たちの上に臨んだのです。神を喜んで生きることができる者とされた。これが、クリスチャンとして神が導いて下さっている平和の道なのです。神を喜ぶことがどういうことなのか分からなかったならば、人間の真の喜びを知らない人というしかないでしょう。

小区分　　（１：67～80）
31 日　１：80　福音の夜明けのための準備

著者ルカは、ヨハネの誕生の次第と、その時に歌ったザカリヤの預言とを詳しく記してきましたが、ヨハネがそれから後、どんな風に育っていったか何一つ記そうとしないで、ただ一言でもって「幼な子は成長し、その霊も強くなり、そして荒野に住んだ」とだけ記しています。これまでの誕生の次第を読んできますと、ヨハネがこれからどのように信仰教育を受けて育って行くのか興味が湧いてきます。

けれども、著者ルカはそのようなことに何ら興味を示さなかったのです。なぜなら、彼は歴史小説を書いているのではなく、福音（神からのよい知らせ）を記すのが目的だったからです。それ故、ヨハネの成長期については、一言で言えば十分だと考えたのです。何と簡潔な、横道に逸らさないように考えているルカの筆法でしょうか。

この事を思う時、今日の説教（聖書の解き明かし）と言われるものの中で、だらだらと横道に逸れ、意味のない事柄を話し、本筋を見失ったまま福音にならない説教となっているものが多いことかを思うと、ルカの単純明快な福音に学ばなければならないことを思わされます。ルカは人間的興味を優先させず､福音を説くことを優先させたのです。

私も横道に逸れないで、御言葉に戻り、一言で語られているこの内容に目を留めることにします。まず３つの事を語っているのが分かります。第１に、幼な子は成長していったということです。これは当然のことでありますが、大切な描写です。神の御手の中にはぐくまれ、両親の愛情の

中でスクスクと育ち、神の使命を果たす者として成長していったと言うのです。
　ここでは特に肉体的、精神的な面の成長を指して言っていると分かります。人はすぐ、他の人と比較して、もっと頭が良かったら、もっと容姿端麗であったら、もっと指導力があったら、もっと優れた賜物があったら等と考えます。肉的な視点で人を見、自分を見てはいけません。神が見ておられる視点で人を見、自分を見ていく必要があるのです。
　神は、どのような人であっても、他の人との比較によってではなく、一人を大事な存在として御手の中にはぐくんで下さり、そのために、両親を用い、環境を用い、その人にお与えになった使命を果たすことができるようにと働き掛け、その人にふさわしい成長をさせて下さるのです。神の御心のままに肉体的、精神的に成長させて下さっている主に感謝し、決して不平を言ってはなりません。
　第２に、その霊（人間は神に造られた時、神と向き合うことのできる部分として霊の機能を造られたと言われています）が強められていったと言うことです。肉体的、精神的な成長も大切でありますが、それ以上に、人は霊的に成長していかなければなりません。霊的な成長なくして神の祝福にあずかることはできません。なぜなら、霊的な存在であるというところに人間の特質があるからです。
　ここで、霊的に成長していったと書かずに、強くなっていったと書かれているのはどういう訳なのでしょうか。それは、私たちの霊というのは、肉体や、精神のように成長していくのではなくて、私たちの内にある霊に対して、聖霊の働き掛けがどれだけ強くなってきたかが重要だからなのです。（唯一なる神様の一形態として、聖霊なる神がおられ、その聖霊なる神が、私たち人間の霊に働きかけて下さ

ることによって、神様のことが分かるように導いて下さると言われています）
　すなわち、私たち自身が、聖霊に働いて頂こうと自分を差し出していき、聖霊が私の霊の内に大きな位置を占めるようになって下さることによって、霊が強くなっていくのです。ですから、聖霊の働き掛けを望もうとしないと、自分の思いの方が強くなるので、霊は弱くなるのです。
　ヨハネは、小さい時から、両親を通して、自分がどのような使命を果たす者として立てられた者であるのか、繰り返し聞き、その使命を果たすために律法を学び、預言を学び、救い主到来を指し示す日に備え、ますます霊が整えられ、日に日に、聖霊が自分の内に大きな位置を占めていくように求め、霊が強くされていったのだと思われます。
　第３に、人々の前に公に出るまで、彼は荒野に住んだと言っています。聖書の用語として、荒野と言えば、訓練の場として書かれていることが多いのです。イエス様の時がそうであったし、パウロの時もそうでありました。荒野での訓練が、使命を遂行するために、ヨハネにとっても欠かせない場であったのです。
　私たちも、私たちに与えられた使命を果たすために、必ず荒野に追いやられる時があります。（もちろんこれは場所の事ではなく、試練を受ける時を意味します）そこでは人は、神と１対１の戦いをするのです。すなわち、神だけを見て生きていく信仰に立てるか、それとも立てないか、本物の信仰か　いい加減な信仰かが振り分けられる厳しい時となるのです。この荒野を通らなければ、いつまでも世的な生き方から離れられないままとなるからです。
　ヨハネが荒野に行くまで、人々は祭司ザカリヤの子としてヨハネに注目していたことでしょう。しかし、その期待

に反し、荒野に行ってしまったので、人々の記憶からは薄れ去っていき、今度再びイスラエルに現れた時には、祭司ザカリヤの子としてではなく、神の預言者、荒野に呼ばわる声として人々の前に現れたのです。

私たち信仰者も、神の招きを受け、人々の期待に反し、神にのみ目を向ける者となり、この世受けする生き方をしなくなることによって、信仰者としての厳しい荒野の訓練を通らされ、神のみを見上げ、世の光、地の塩として人々の前に立つようになるのです。

荒野の経験は、世的な誘惑に打ち勝つためでありますから、楽なものではありませんが、このところを通らされなければ、神からの使命を果たす者としては用いられないのです。

こうしてヨハネは、肉体的、精神的な成長をし、霊性は日に日に強められ、預言者としての訓練を受けるために荒野に行き、福音の夜明けのための準備が着々となされていたのです。キリストのこられる舞台はすべて揃いました。後は、キリストの出現を待つだけであります。

★★★★★★★

〈おわりに〉

御言葉は古い時代に書かれたものでありますから、今日の私たちにとって理解しやすい書ではないことは確かです。まして、まだ信仰を持っていない人が聖書を読んでも分かりにくく、何を教えているのか理解できないものです。しかし、聖書の御言葉が分かるようになりますと、神様がどのように私のことを導こうとして下さっているかが感じられてくるようになってくるのです。

あなたにもぜひ聖書を読んで頂きたいと願って、聖書の一部ではありますが、それを分かりやすく解説してきました。そこから、神様があなたのことをどのように思い、どのように導きたいと願っておられるかを知って頂くことができたなら、こんな幸いなことはありません。

神の御言葉は、単なる言葉ではありません。神の御言葉は、それを読んで受けとめようとする者の上に神が働いて下さる、力あるお言葉なのです。時には力づけ、時には自らの愚かさや罪を指摘し、時には慰め、時には喜びに溢れさせ、時には感謝に満たして下さるものであります。その力をぜひ味わって頂きたいのがこの解説の目的です。できれば何度も読み返して、そこに記されている意味を受けとめ、聖書の御言葉に表されている、奥深い大事な神の御思いを受け取って頂けるならうれしい限りです。

もっと読んでいきたいと思われる思いが起こされるなら、この解説を手掛かりに、聖書を直接読んで見て下さい。手助けが必要な方は、メールでも電話でもして頂けるなら直接解説することができます。あなたの上にも、神が直接働いて下さいますように…。